

見える子ちゃんの先輩

生死郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突然、普通の人間には見えない存在が見えるようになつた女子高生みこは、その存在に怯えながらも精一杯、見えないふりをしてやり過ごしていた。だがそんなある日、彼女のもとに一人の黒髪の結界師が現れた。

2022/7/18 日間ランキング 23位になりました。皆様、ありがとうございます。

2022/7/19 日間ランキング 7位になりました。皆様、ありがとうございます。

目 次

あなたも、見えてる？	1
見えるだけ	5
見えているもの	10
そう見えている	16
ご褒美	21
私の先輩	27
おしり大福×シユラスコ×はらこ飯	34
夜のお仕事	41
愛する者支えるという覚悟	50
帰還	57
死んでも働くことになるとは気の毒に	66
神はそこまで人に興味を持つっていない	71

あなたも、見えてる？

四谷みこは人には見えないものが見える。異形で奇怪。恐ろしく禍々しいものたち。

「ああ……、今日もいい天気だなあ」

みこは朝起きると毎日思う。

今日こそ見えませんように。怖い思いせずに一日を過ごせますよう。信心があるわけでもなく、祈る神すら決まっていない漠然とした祈りをする。

『ね、ね、……あそぼ。ね、あそぼ』

(……怖い怖い怖い怖い怖い怖い！)

朝からいつの間に近づき寄り添う異形。日常を蚕食してくる非日常の侵略者。

みこは妖異に自分が見えると知られるのは不味いと、直感的に知っていた。しかしながら、みこは彼らが見えるだけで自衛や抗うすべを持たない少女である。

故に、彼女は初めて異形たちを認識できるようになつた日から本能的に“シカトする”という選択肢を探つた。

自分を見えないと思つた異形たちは暫くするとみこから離れるようになつていていたことで、彼女は唯一できる自衛手段を続けていた。  
『こつち見て……ね、ね。……見て、見て……』

(……やめて！やめて！めっちゃ怖い！)

学校へ向かうバス停で、みこはいつも通りバスを待ちながら手持ち無沙汰を誤魔化すためにスマートフォンを弄る今どきの女子高生にしか見えない。

だが、みこは空いたほうの片手は丈の短いスカートの裾を震えながら握りしめていた。恐怖心を誤魔化すときの彼女の癖だつた。大きな虚のような目でみこの顔を覗き込む。

(――!)

みこは思わず声が出そうになつた。そのとき――

「方位

ほうい

みこの近く異形とは別の声が聞こえた。

「定礎」

振り返ればそこには学生服を着た少年が立っていた。

「結！」

みこのそばに立つ異形は半透明な立方体に囲まれていた。

「……え？」

呆けたような声を出すみこ。

異形も困惑している様子だが、少年が自分を見ていることに気がついた。

『見え……見えるの？』

「だ、ダメ！」

みこは思わず、声をあげて少年に視線を逸らすよう言いそうにする。

『そうだよ。俺はお前が見える』

『見える。だからお前を消す』

少年が冷然と異形に言つた。怯だを感じさせない態度である。

「滅！」

立方体は瞬きよりも速く縮小して、異形を圧碎した。

「ひっ！」

縮小の風圧でみこの長い黒髪やスカートが翻る。恐る恐る、みこは少年を見た。自分が恐れ、怯えるしかできない異形を一方的に滅した少年。

頭髪はくせのある髪で黒に近いダークブラウン。端正な顔立ちの少年。学生服を着ていることから学生と思われる。

「あなたは……見えるんですか」

「そうか、やはり見えていたか。ああ、俺も見える

少年が真つ直ぐとみこを見据えた。

「俺は墨村景守。結界師だ」

少年——景守はそう言つた。彼はポケットからハンカチを取り出して、みこに差し出した。

「え？」

「怖かつただろう。涙、拭いてくれ。これは未使用だから安心していいから」

「ありがとうございます……」

きつちりアイロンのかけられたハンカチ。みこが受け取ったとき、自分がはじめて自分が瞳に涙を湛えていたことに気が付いた。

「あ……あれ……。ご、ごめんなさい」

「気になくていいよ。安心してれていい」

景守は低く、優しい声音で諭すように言う。

「それで、あ……。すまない、名前をまだ訊いてなかつた」

「あっ、私こそすみません。四谷みこです」

「よろしく。四谷さんは見えていたようだが特別、身を守る手段があるわけではないんだな」

「あの、はい……。見えるだけなんです。それで、私は最近急に見えるようになつて……」

景守に少しづつ、みこは話し始めた。今まで言えなかつた秘密の悩みを話せる相手、ということもあって慣れないと異性であつても徐々に言葉が止まらなくなってきた。

「ほんとに怖くて、私以外誰も見えてないし、盛り塩しても全然効果ないし、無視してたらどこか行つちやう奴もいるけど、さつきの奴みたいにしつこく付きまとつてくる奴もいて、家に居座つたり友達に絡み付いたりする奴もいて、このままだと耐えきれなくてあいつらに見えることバレたら私どうなつちやうんだろうって思うと本当に怖くて……だから、お願ひします。助けてください！」

「ああ、いいぞ」

（え、軽つ!？）

気が抜けるほどあつさりした少年の言い方にみこは驚いた。しかし、端正な容貌に浮かべる笑みには不思議と安心感と任せられるという安心感があつた。

「とりあえずコレ連絡先を渡して置くので、後で会おう」

学生服の内ポケットから取り出したメモ帳に電話番号を走り書き

してみこに渡した。

「詳しい事はそのときに話そう」

「あつ、はい。すみません、ありがとうございます」

良かつた、伝わった！それに助けてくれそう！とみこは内心小躍りしたくなるほど喜んだ。

秘密の悩みを共有できて、しかも助けてくれるという。まさにヒーロー見参！神に祈った甲斐があつたというものだ。

「お互い、学校があるだろうし放課後でいいよね」

「そ、そうですね。よろしくお願ひします」

景守は青山にある学校に在学しているらしい。そこは、つい最近まで受験生だったみこはも訊いたことがある学校で偏差値はみこが通う高校よりも高かつた。制服が可愛くて魅力的だつたのだが学校選びでは考慮から外していたので印象的に覚えていた。

「墨村さん、一年生なんですね。じゃあ、先輩だ」

「」

景守は瞠目したまま沈黙している。前髪を弄つて真剣そうに考えている。

「あの……」

みこが胡乱げに景守を見ると、彼女の視線に気づいた景守は誤魔化すように頭を搔く。

「いや、なんでもない。そうだな、先輩つてことでよろしく」

「は、はあ、よろしくお願ひします……先輩」

景守の何か満たされたような笑みを浮かべた様子から、とりあえず彼の歓心を得ることができたようだと、みこは安堵する。

その後、景守と別れたみこはHRにギリギリで登校した。

「先輩、どういう人なんだろう……？」

みこの手には返し忘れた景守のハンカチがあつた。高級なブランド品というわけではないが良いブランドで柄の品もいい。持ち主のセンスが良いのだろう。

「学生で、あいつらを倒すことを仕事をして……。ゴーストバスター？」

## 見えるだけ

「ごめんハナ。今日は予定あつてさ」

四谷みこはいつもならば、一緒に放課後を過ごす友人の百合川ハナとは今日は学校でわかれることにした。登校前に会った墨村景守との約束を果たすためだ。

幼く可愛らしい顔立ち、明るく賑やかしい性格が現れているようなきらきらと光る瞳。それでいて肉感的で豊麗な身体つきは、みこにも劣等感コンプレックスとはいかなくても、羨望してしまう。

「えつ、あ、カレシ?」

「まあ、うん。カレシカレシ」

ハナのからかい混じりの追及をみこは微苦笑しながら右から左へ受け流す。

先輩——墨村景守を彼氏と称するのは畏れ多いと思いつつも、みこはハナと別れて景守と連絡を取り渋谷のファミレスで集まることにした。

「ここにちは、四谷さん」

「ここにちは先輩。あと、私のほうが年下ですからそんな畏まつた呼び方をしなくてもいいですよ」

「そうか? ジやあ……みこ、と呼んでも?」

一気に踏み込んできたな、とみこは思うが存外悪い気がしなかつた。

「はい。それでいいです」

「じゃあ、みこ、君は何か注文する?」

景守はまるで友人と放課後の雑談でもするかのように、みこに訊ねた。彼女は紅茶とモンブラン、景守はエビフライとコーヒーを注文した。

「あの……、先輩は見え……」

みこが景守に訊ねたかつたが途中で言葉が途切れる。景守はみこの怯えた表情と視線の動きから推察する。

「——結」

景守が自分とみこの座る座席をテーブルごと囲つた。

「え？」

「この結界は音を遮断する。人にも奴らにも、声が届くことはない。それにはいつらからの視線も、今はすらしてある」

「視線を……？」

景守の年齢に似合わない超然とした趣をしているのが、みこには動搖を鎮めてくれる不思議な作用があつた。

「この店にも何体かいるが離れているなら兎も角、真横にいるのは流石に怖いよね」

「……………」

自然とみこは息を吐いた。身体の強張りが幾分解けた気がする。

「先輩は見慣れているんですか？…………アレを」

「まあな。眼が良かつたこともあるが、結界師である俺は空間の状況や変化に敏感だがら、ああいう異物が混じるとすぐにわかるんだ」まるで明日の天気の話をするように、景守はエビフライをナイフで切り分けて食べながら説明する。

「けつかいし……」

みこがいかにもどう漢字を当てればよいかわからない、というような発声に景守は苦笑してスマートフォンのメモ帳アプリで漢字を打ち込んで見せる。

「俺がみこにばかり話を訊くのもフェアじゃないか。俺も自己紹介をしておこう」

景守はナイフとフォークを置いて、ブラックコーヒーを一口呷る。  
「俺は墨村景守。高校生だが間流結界術を使う結界師としても活動している。生家はかつて土地の守り人だつたがすでに守り人を廃業。今はフリーランスの結界師だ。実家から出て上京してからは神田に持つて いるマンションに一人暮らしで住んでいる」

（神田！ マンションを持つていて？…………先輩って実は富裕層？）

誇示するつもりない自然な様子で景守は説明をしているが、みこは戸惑うばかりだ。

「…………結界師つて儲かるんですね」

「結界師というか異能者という括りなら別にみんなが儲かるわけじゃない。ただ稀少な技術者で特に優秀と評価してもらっていることもあつて収入も多いんだ」

景守は関東それも東京周辺で異形たちが多数発生しており、当初対処にあたっていた異能者が四人も殉職した事態から、解決のために景守が地方から参集させられたのだ。

だが、殺伐とした事情については、みこを不必要に怯えさせると判断して説明から省いている。そのためある程度真実をばかしつつ、景守はみこに説明する。

「じゃあ、しばらくは東京にいるんですか？」

「そうだね。元々本拠地を決めていたわけじゃないし、このまま滯在してもいいかもな」

続いて景守からの質問にみこが答え始める。彼は静かに訊いて必要ならば質問をして細かくみこの事情を把握しようと努めた。彼女にとつても景守は気さくでサッパリとした親しみやすい人柄で、当初想像していたときよりも緊張せずに話すことができた。

最後までみこの話を訊いた景守がチーズケーキを注文した。

「あの、先輩……？」

「チーズケーキは好きか？　これはご褒美だよ。頑張ったね、みこ。よく有象無象相手に頑張つたな」

「……私、ちょっと嬉しいです。見えるようになつて初めてわかつてもらえたっていうか……。今までこういう話ができる人いなかつたから……」

「そうだろうな。もう、苦しいならば苦しいと言つて良いんだ。俺の力の及ぶ限り君の助けになろう」

「ありがとうございます」

みこの言葉が震えた。まさか、こんなことを言つてもらえることがあるだなんて、みこには想像もしていなかつた。

「ずっと怖かつたんです。友達にアレが憑いていたときがあつて、それ以来たとえば友達が待ち合わせに遅れたとき。ふと考えてしまふんです。あいつらが何かして友達に何かあつたんじやないかつて。

友達はイイ人なんですずつと元気でいて欲しい。もしも、私が見えることがバレてそのせいで友達や家族に何かあつたらと思うと、それは私のせいじゃないかと

「そんなことはない」

みこの言葉を遮るように景守が言つて、彼女の頭を撫でる。結界師の黒褐色の瞳の奥には穏やかな光が宿っている。

「君は優しいね。優しいただの女の子だよ。だから君は何も気に病むことはないんだよ」

頭を撫でられながらみこは何だかいろんなモノが込み上げてきて、胸が苦しいような泣きたいような気持ちになつた。

その後、景守とみこは今後の対策を話すようになつた。  
「俺が禍祓いの呪具を用意するとして、結局のところ君にはシカトを続けてもらうしかないな。そこで俺に助けを求めてもらえば駆けつけて対処する、という感じかな」

「そ、そうなるんですね。見えなくする何かとか、ないんでしょうか」

「いやあ、どうやら君が見えるのは何かの障りということもないし、見えていることが普通という状態みたいだ。無理に見えなくするといふのは、君自身にも悪影響を受けることになるし。自衛のために武器を持ったところで、みこ。あいつらとバトルできる?」

「無理ですね」

即答である。みこに迷いがなかつた。アレと戦う自分というのではなく、まつたくイメージができなかつた。怯えて腰が引けて返り討ちになるのがオチだつた。

「だろうね。まあ、生兵法は大怪我のもとだ」

回答を予想できていた景守は頷いた。よほどアレらを憎悪しても殺傷したいと望む者もそうはない。ましてやみこは荒事が向いた気性ではなく、本当に普通の女の子なのだから。

景守とみこはチャットのIDを交換して、みこがヤバい奴らと遭遇したときに対処できるようにした。

「あとは呪具だけど、それは俺が専門のまじない師から取り寄せるからしばらく待つてくれ。さて、今日のところはこれで終わりかな」

「ありがとうございます。あの……それと、実は

「何?」

「……うちに何体かいるんです」

「……それじゃあ、お宅訪問させてもらつてもいいかな?」

どうやら異形たちはみこの日常に深く干渉しているようだ、と景守は嘆息した。

## 見えているもの

「あ、恭ちゃん！」

「お、ハナか」

放課後、百合川ハナは友人の第四谷恭介と偶然にも出会った。彼も下校途中だったようである。

「あれ、姉ちゃんと一緒じゃないの？」

「なんかね、カレシに用があるんだって！ みこつて本当にカレシいるの？」

「……は？」



四谷みこは墨村景守すみむら かげもりを自分の家まで案内していた。最寄りのバス停で降りるまでバスに乗りながら、みこは家の状況を景守に説明して、景守も気になつた点は彼女から訊き出していた。

「なんと、まあ」

明敏な景守にしては覇気に欠けた感想である。発言に困っているようにもみこには思えた。実際、景守は何体もの異形が家にいるなど異常な事態に内心絶句していた。

「布団の中にいるつて嫌だね。よくそのまま眠れたな」

「寝たというより気が遠くなつたんだと思います」

「そうなつても仕方ないな」

景守がまるで我が事のように困つた風情で微笑むので、みこもつられて笑つてしまつた。

みこが景守に抱いた印象は優しい人だつた。自分の悩み事や相談を訊いてくれた。悩みを共有して理解して、そしてどうすればいいのか答えをくれた。男性ということもあつて初めは身構えてしまつたが、話しやすく一緒にいることも苦痛や負担には思わなかつた。

みこと同じ、いや、みことは異なり幼い頃からあの異形たちが見て、その相手をしてきた。そしてアレらに抗う力を持つ。みこには心強い存在だつた。

「あの、家にいるのも結界で退治するんですか？」

「そうだよ」

「今の時間、家には母がいると思います」

みこがどうやつて家族に、景守を紹介しようか悩んでいるのかと景  
守もわかつた。

「まあ、この家族には会うことなくやれると思う。あいつらだけを外へ  
排出して処理するつもりだ。それに」

「それに？」

「屋内で一体一体滅したら、奴らの碎けた残骸が飛び散ることになる  
からさ。それは自然消滅してくれるけど、だけどそれってみこの精神  
衛生上宜しくないよね？」

みこは凄惨な光景を想像して顔色を悪くした。やや潤んだ瞳で、頭

一つは高いところにある景守の顔を見上げる。

「……お心遣いありがとうございます」

「いえいえ」

バスに降りてみこの家に前に到着した。景守は家に入ることもなく  
門前で佇んでいる景守をみこは胡乱げに見ている。だが彼女はすぐ  
に景守がただ突つ立っているわけないと知る。

(……え?)

みこは瞠目する。景守の足元から薄く地面を侵食する影を噴き出し、  
みこの家を一枚の薄皮のように覆い尽くしたからだ。

「え? 何? コレ、何?」

みこは狼狽するが景守は黙して家を眺めていた。じつと見つめる  
黒褐色の瞳は何も映していないようで、不安になる。

おそらく時間にして一分もからなかつたのだろう。しかし、みこ  
は唐突なことに戸惑いまた緊張していたので正確な時間を把握でき  
なかつた。

「ああ、いるね。みこの把握しているものより多いぞ」

「え? わかつたんですか」

「うん。この足元から広がる影は探査用結界で、領域内を調べる効果  
があるんだ。そして、残念ながら君の家はとんでもないお化け屋敷だ  
と判明した」

「わかつていても、言われるとなかなかクるものがありますね……」

「冗談抜きによくみこたちは生きていたと驚いてる」

専門家からしても自宅は異常な魔窟なのかと、みこはゾッとする。鉛を流し込まれたかのように胃の辺りが重くなり、目の前が暗くなる。額に浮かんだ汗が頬を流れ落ちた。家族や自分に被害が及ぶよりも前に景守には対処して欲しい。彼女は切実に願った。

「約束通り、一人を除いてあとは滅しよう。だが、これは少し面倒そうだ」

景守は嘆息しつつ、呪符を三枚抜き取るとそれを人型の式神に変化させた。見た目はそれぞれ異なる端麗な容姿の青年だ。

「ひ、人？」

「これは式神。まあ、俺が自在に動かせる人形みたいなものだ。彼らにも退治を協力させる」



景守は式神とともに空中に出現させた結界の上に立つ。それはみこの家の四方を囲むような立ち位置だ。

「四師方陣。しじょうじんこれ苦手だ」

景守は微苦笑を浮かべ、術の準備を始める。しじょうじん四師方陣とは四人の術者が一つの結界を形成する術だ。複数人で一定空間の隔離、領域支配を行うため各人の協調が必要であり、術者の技術力や出力が不均衡では結界の維持はできず結界は崩壊してしまう。

そのような難易度の高い術を、術者の代行を式神にさせる景守のやり方は通常以上に難易度を高めていた。

「方囲！」

景守は囲うべき標的である家を指定する。

「定礎！」

結界を開拓する位置を指定する。景守から放出された力を式神が力を受けとめると、別の式神へ力を走らせる。景守から式神へ、そして式神から式神へ。また式神が受け取ると景守へ返した。そういうことで家を囲むように力が四方に走る。

「うおっ、ああやつぱり難しい！」

景守は悪態をつく。彼が式神と行う大作業は実に困難である。

ただでさえ高度な技を行使しつつ、術者の代行をさせる式神が実施する術の粗い部分や力の足りない部分を、景守が補うため彼が請け負う負担は通常以上に重い。

忌々しげに舌打ちをする景守。本来はせずに済む苦労をしているのだからそうしたくもなる。だが――

(彼女に要らない心労はかけたくはないな……)

困っている女の子に対して男子としては格好をつけたくなるのだ。それが可憐な美しい少女ならば尚更だ。だからこそ、心を碎いてこのような大業を行おうとしているのだ。

「――<sup>けつ</sup>結つ！」

家を囲うようにして結界を形成して展開し始める。力の不均衡が起こらないように慎重に作り出すため、結界の展開は普段より遅い。家を囲む大結界が徐々に展開される。輪郭に多少のぐらつきが生じてもすぐに景守が修正する。試行錯誤しながらも大結界を展開することができたのは、彼の年齢に似合わぬ精緻を極めた技術力ゆえだった。

「よし、できた！　さあ、出てこいっ！」



「す、凄い大きな結界！」

みこは驚嘆しながら景守の大作業を見守っている。家を囲むように展開された結界が徐々に上空へ上昇する。なんとも現実離れした光景を、みこは茫洋と眺めていた。

「ひつ！」

みこは思わず、声を漏らす。大きな結界に異形だけが家から隔離されて上空へ持ち上げられていた。それは網で魚を海から掬い上げるかのうに、奴らは結界に囚われ上空に持ち上げられた。

象ほど大きな人頭の獣、不気味な角度に頭が曲がっているスース姿の男、赤子のようなもの、瘦身の人型。さらに結界に小さなものが混じっている。

そして結界は徐々に縮小され、異形どもは断末魔を上げながら滅却

された。

「す、凄い……。本当に凄い！」

みこの表情は明るい。恐れていたものたちが消え去つた。醒めない悪夢かと思ったがこのように救われることがあるとは、みこは頬を紅潮させ歓喜した。



解

式神をもとの紙片に戻した景守は結界から降りて地上に戻った。景守や式神の足場にしていた結界も解除する。

お疲れ様です、と言いつつみこが景守のもとに近づいてくる。憂いが晴れた表情のみこを見て、苦労した甲斐があつたと景守は思った。「これでだいたい片付いたよ。——君の希望通り一人、ちゃんと残した。本当はこういうこと、よくないんだけどね。だが、まだ実害がないようだし、俺は祓うことはできても導くことはできないから、君やご家族に任せよう」

「……はい、ありがとうございます」

みこは深々と頭を下げた。大恩ある結界師には感謝しても感謝しきれなかつた。しかし、景守にとつては面映ゆい思いだつた。

誰にも言わなかつた本心でも、みこは景守には話すことができていた。

「父とは喧嘩別れでした。つまらないことでの言い争いなんです。『大嫌い』なんて、そう言つてしまつたんです。……心にもない言葉でした。それ以外、無視を続けていたんです」

同じく家族を失つた母や弟にも言えなかつた後悔を初めて言葉にした。

「本当にありがとうございました。どうお礼すればいいのか……」

「気にしなくてもいいが……」

「でも、先輩はこういうコトを仕事にしているんですね？ それなのに何もお返ししないというのは……」

「……そうだな。それでは、俺の仕事を手伝つてもらおうかな」

「手伝う？ わたしが先輩を？」

あまり見返りもなく行うのも彼女には負担となるかと思い、景守は提案する。

「無茶なことは要求しないよ。どこであいつらを見かけたとか、そういう話を教えてくれたらそれでいいから」

「そんなことでいいんですか？」

「いいよ。この辺り一帯を調べないといけないが、当てもなく探すよりずっと楽だ」

「わかりました！ それで、先輩の手助けができるならば」

みこが何か嬉しそうに言うことが景守には不思議だつたが、前向きになつてくれるならばそれでいいか、と景守は結論づけた。

「じゃあ、俺は帰る。あとで連絡をしよう」

「はい、本当に今日はありがとうございました」

「何度も言うが気にしないでいいよ。これは俺が好きでやつたことだから」

「好きで？」

不思議そうに見上げるみこを見て、景守は柔らかに微笑んだ。

「君を見ていると何かを伝えてあげるのではないかと、そう思つてただ話をしていたかつたんだ。奴らを祓うのも、そのついでだ」

景守はやや照れくさそうにしながらも、正直な本心を言つた。思い出すのは、独りで見えることを秘密として抱え込もうとするみこの姿。その様子が景守に彼女の力になりたいと思うことに繋がつたのだ。

「私も、先輩と話せて嬉しかつたです。お仕事の手伝い、頑張りますね」

憂いが晴れたみこの優しげな表情を見ていると、本当に助けてよかつたと景守は思つた。そうしてぼんやりみこの顔を眺めていると、彼女が首をかしげる。

「先輩、どうしました？」

「ああ、いや……。なんでもない、また、何があれば連絡してくれ」見惚れていたともいえず、景守は頭を搔いて誤魔化した。

## そう見えている

四谷みこの家を出た墨村景守はさつそく旧知の仲であるまじない師の神津国光に電話で連絡した。

神津は景守にとつては、頭のあがらぬ先達のひとりである。神津国光は二七歳で、実際の年齢よりも落ち着き、ごく自然な自信を身に着けているように見える。異能を扱う裏社会に有益な才能をもつという点で、彼は新進気鋭の異能者だつた。

まじないを紋様にして彫ることができる呪刻師である彼は、まじないに関する論文を書いて、それが裏会の幹部に認められ、スカウトされそうになつた経歴がある。才幹でいえば異能者としても上位であるが、輪う意味での上位者らしさがない。年少者に対しては、気さくに振る舞うこともできるし、年長者にむかって、オブラートをつけたり外したりで毒舌を振ることもできる。

「まったく、美女に惚れこんで秘術を安売りするとは、プロ失格だな」「なんてこと言うんですか。俺は協力者を作つて事態解決がすみやかに行われるよう頑張つているだけですよ」

景守はせいぜい不本意そうな表情を作つてみせた。そうは言つても景守がみこにまつたく関心がないかと言えば嘘になる。

古めかしい表現を使えば大和撫子のようで、清廉な美しい容姿は一際目を引いた。表情の変化こそ少ないものの、彼女は典雅で、しとやかで、しかりんとしている。白磁のような肌、花弁のような唇、黒絹のような長い髪と、麗しい楚々とした容貌は景守の心中強く残つていた。

「協力者ね、その娘さんと会う口実を作つたのだろう。こまつしゃくれた奴め」

「そもそも、一介の学生が俺への報酬など払えるわけがないでしよう。金はあるところから取るが、あの娘からは労働力を提供してもらえるわけです」

完璧な論法に思えた景守だが、神津には鼻であしらわれるだけだった。

「まあそういうことにしておいてやろう。お前さんが騎士道精神に目覚めても悪いことではないからな。まがはら禍祓いの呪具はこちらで用意しよう。納期はどれくらいがいい？」

そこからは実に散文的な、ビジネストークが三〇分ほど続いた。



日本には裏会という全国の異能者達を統括し取り仕切る自治組織がある。日本各地にある靈地の管理も裏会の仕事のひとつである。そして、墨村景守が裏会からの依頼を請けた東京の川伏——四谷みこが生活する土地。そこはとある異能の家系が裏会から管理を任せられていた。

裏会から依頼を請けてやつてきた結界師が、著名な能力者ではなく、学生服姿の小僧であることは、土地の管理者である異能者——俗社会では著名な起業家として知られる男——の自尊心を完全には満足させなかつた。そのことが景守にはよくわかつた。彼でなくとも察せられないわけがなかつた。

管理者の持つ会社の役員用応接室に通されて、コーヒ一杯で二時間弱も待たされでは、凡庸な人間でもなければ洞察力で推察されるというものである。

墨村景守は凡庸でもなかつた。それは必ずしもよい意味においてではないにしても、非礼を承知で客人を待たせて、応接室に姿をあらわした管理者が目撃したのは、えらく真剣な表情で持参したグラビア雑誌に見入つている若い結界師の姿だつた。管理者に気づいた結界師は雑誌を机に置く。さつきまで凝視していた美女が裸体を惜しみなく披露したヘアヌードのページが開かれたままだつた。

「」

結界師と視線がぶつかつたとき、管理者は東京郊外でひそかに囲つている愛人の存在を見抜かれたような気がした。雑誌の美女が愛人によく似た面差しだつたのだ。

お互にビジネスマナーに則つた形式的なあいさつをすませると、景守はただちに本題に入つた。

「私も上京してきたばかりですが、この東京は好きです。市ヶ谷や川

伏あたりも良い。きっとあなたの一族の手腕によるところが大きいのでしよう。ゆえに、あなたが選択を誤り、その結果、あの土地があなたの一族の手から離れることはよろしくないと考えています」

管理者は鼻であしらおうとした。

「（）親切なことで、ありがとうございます。ですがご心配は無用とうもののです」

「あなたは（）存じのはすです。裏会から派遣された異能者が四人も殉職した。だというのに未だに事態を收拾させる方策を打ちだしていらっしゃらない。裏会があなたの管理能力に疑問符をつけるということを。幹部はあなたの一族から権限を剥奪して、他家に委任することとなるでしょう。そういうえば、裏会があなた方にあの土地を任せるまで最終選考に残っていた一門がありましたね」

若い結界師の論法は、スプーンのように管理者の心のうちをかきまわした。

「つまり、事態の解決に積極性がないと裏会に見なされたら、管理者としての役目を？ 奪する、と、こうおっしゃるのですな、墨村君」

「そうです」

管理者の言葉に対して、景守がやや意図的な簡潔さで答えると、管理者は自分が小僧のペースに巻き込まれていて危險を覚えた。「だが、幹部連……十二人会は我々に約束してくれましたぞ。かつての騒乱の功に報いるための報奨があの土地の利権であると！ 何かあれば、そう例えれば此度のような事でも、解決は裏会のほうでしてくれると

礼儀の範囲内で、ではあつたが、景守は相手の甘い計算を軽くあしらつた。

「それはいくらでも気前よくなることでしょう。彼らは何もあなたがたに譲るわけではない。一時的にあなたがたに預けるだけのつもりですからね」

景守の舌はまるで魔法の杖のように振るわれて管理者の心臓を一打ちされた。管理者は思わず少年結界師から目をそらした。すると、卓上に放り出されたグラビア雑誌の美女と目が合つた。

「……ああ、ええと、君は、いや、あなたのおっしゃるようなことがあっても、我々には今回の案件にもいくつかの対策があるのです。何もあなたにご心配いただくことはありませんな」

その対応策なるものが景守には読めていたが、洞察力の鋭敏さを完全に公開してみせるのは、必ずしも得策ではない。彼は管理者の顔を見やつた。管理者の顔には、ためらいと、探りを入れる表情がもつれあつた。

「お知りになりたいですか？」

少年結界師は、策士の表情を作り、その表情に相応しい声で宣言する。自信という貴重な資源は有限なもので、この場で若い結界師がそれを独占してしまったようだつた。

管理者からは活動に必要な情報の共有等の約束を、景守は取り付けて会談は終了した。管理者も裏会へ干渉されないように口利きすることとなつた。

景守は感謝のしとしてグラビア雑誌を管理者へ押しつけて、応接室を出ていった。これから会う少女には、グラビア雑誌を所持することとは秘しておくべきことと景守は判断したからだつた。



「あ、先輩からだ。もうすぐ着くって」

四谷みこはスマートフォンに入つたSNSのメッセージをすぐに開いて確認した。

みこは放課後、景守と会うため連絡を待つて落ち合う予定だつたので、その時間まで友人のハナと街を歩いていたのである。

「ごめん、それじゃあ私は……どうしたの？」

みこが胡乱げに友人を見た。友人はむうと頬を膨らませてご立腹のご様子。高校生にもなつて頬を膨らませる怒り方は幼稚に見えるが、彼女の容貌だとそれもまだ似合う。

「だつてみこつてば、ずーっとなんかソワソワしててさ、『センパイ』

からメッセが来たらすつごい嬉しそうなんだもん」

浮氣者ゝと怒るハナに、みこはハイハイと受け流す。みこは友人を

いなしながら、口元を触れてみる。自分は本当に微笑んでいるようだ。

（でも、たしかに先輩に会えるのは嬉しい……）

家に憑くモノを退治してくれて、あとは呪具とやらを受け取ればそれで終わりかと思えば、寂しさを感じていた。だけど、景守がみこの協力が欲しいと言われたとき、つまり今後も付き合いが続くことになつた時、みこは嬉しさを感じて思わず笑ってしまったものだ。

「そつか……私、先輩に会うことが楽しみなんだ……」

うわあ、惚気てるよ、と呆れる友人をよそに景守が案内してくれたという彼の行きつけのお店が楽しみで、みこは再びごく自然と微笑んでいた。

## 「ご褒美

四谷みこは友人と別れてから墨村景守すみむらかげもりとの待ち合わせ場所に向かう途中、不幸にも怪異と遭遇してしまったがシカトをしてやり過ごし、景守と合流した。

みこは景守について行く。今日は食事をしながら相談をする予定だつた。彼の案内で入ったレストランの屋号はチエシャ猫亭と言つた。景守はここのかつての常連客らしい。

みこには物珍しさから店内を見渡す。店の中も清潔感があり、落ち着いた雰囲気の料理店で、調度はすべてノスタルジックなもので統一されており、手編みのクロスがテーブルにかかっている。みこの年齢の学生だけに入るにはハードルが高いお店だ。

「ここは味がいいし、値段もそこまで高くないんだ。ケーキは同じ建物内の菓子店から卸していてこれもまた美味しい。個人的にはモンブランがおすすめだ。あと、俺は飲んだことはないがお酒も良いのが揃っているらしい」

「そうなんですか」

（通い慣れている……。流石は先輩、大人だ）

みこならば自分からこういう店に通おうとは思わないだろう。さらに景守が言うにはここには異形が入つても定期的に彼が退治しているせいか異形たちは寄り付かなくなっているらしい。仮に今、異形が侵入しても景守がすみやかに退治してくれる。本当に心から安心できる食事をみこはできるのだ。

二人はメニュー表を眺めて、景守はジエノベーゼを選んだ。

「みこ、君は？」

「私は……先輩と同じもので」

注文を取りに来たウェイトレスに注文して、ウェイトレスが帰つた後にみこは景守にこれまでに怪異と遭遇した場所について報告する。

景守は地図を広げてマークしてくる。様子はさながら作戦会議だ。

「学校……やっぱり多いな」

「はい、三階にいるのに窓の向こうを歩いているところを見たときは

本当に怖くて……。竦んで動けないままちよつと泣いてしまいました」

みこは恥ずかしい思いで話した。顔を覗き込まれたときは肝が冷えた。……遭遇する前にトイレへ行つておいてよかつたと後ろ思つたものだ。

「よく堪えたね。凄いよ」

率直に褒められてみこははにかんだ。まさか独りで戦つていた日々を褒めてもらえる日が来るとは、ついこの間まで思いもしなかつた。

「それにしても更衣室と女子トイレか……厄介だな」

「？ 厄介、何でですか？」

胡乱げにみこが聞き返すと景守は困ったように微笑み、ダークブラウンの髪を謎魔化すように搔く。

「だつて、ほら、俺は男だし」

「あ」

「女子更衣室や女子トイレというのはね……。結界師の結界以上に強固な結界があるんだ。越えれば不味いことになる」

深刻な表情で言う景守。

景守は前髪をかきあげる。憂愁にしずむ様子はなかなか絵になる場面など、みこはじっと眺めながら香気に考えてしまつた。女子トイレに入れなくて困つているだけなのに。

「あの……うちの学校のあれは退治できませんか？」

みこは切実な声で訴える。今日もヤバい奴らと幾度も遭遇してしまつた。

「女子高だつたよね？ 人が少なくなる深夜に入つて退治するとどうか。みこ、すまないが根回しが必要になるからすぐには動けないから、まだ暫く我慢してくれ」

「根回し、ですか？」

「まあね、君の学校関係者でこちらの業界関係者はいないようだし、校内に立ち入るための口実を作る準備をしないといけない」

「そういうこともしないといけないんですか？」

意外そうにするみこを見て景守は笑う。

「そうしないと不法侵入になつてしまふよ」

「そ、そうですよね……」

みこは結界師という浮世離れした存在から、きっと不可思議な力でなんとかするのだろうと思い込んでいた。

「学校や司直を誤魔化すために暗示だとなんとか使う手もあるけど、そういう乱暴な手段はできれば避けたいな」

「方法としてはやれないわけじゃないんですね」

「まあね。やれなくはない。……そうそう、今回とは関係ないけど実家が守り人をしていたときは、その守護していた土地は学校だつたんだ」

「学校でああいうのを退治していたんですか？」

「そうだよ。まあ、基本的に働くのは夜だけだつたけどね」

夜、怪異と戦う結界師たち。まるで伝奇小説のような話だと、途方もない思いでみこは景守の話を訊く。

「そのときはどうやつて隠していたんですか？」

「ああ、そのときは何百年もうちともう一つの結界師の一族が守護していて、学校や行政や警察なんかにも業界の事情を知っている人たちがいたからね。結界師の仕事に関わることはお目こぼしをもらいつつ、人々に知られないように協力していただんだ。学校も夜間に警備員はいないし、警備システムも切つていたらしい」

近隣住民も古くからそこに住んでいた人々は、夜はよくないことが起こると決してその学校に近づくことなかつたという。

「あの、その学校は今どうなつているんですか？」

「まだちゃんとあるよ。だけど、実家が守っていた理由である土地の力は失われたから今はただの学校だ」

「失われた……？」

「別の場所に力の根源となる存在を移したそうだ。それで土地の守り人としての家業は廃業だ。まあ、俺が生まれる前の話だから、詳しくはわからないけどね」

景守の説明が終えた頃、ジエノベーゼが運ばれてきた。飲み物は景

守がコーヒー、みこは烏龍茶だ。

「さあ、怪異の話はまた後で、食事を楽しもう。いただきます」

「そうですね。——いたします」

みこは手を合わせていただきますと言つて、フォークを手に取つた。

香草の芳香がみこの鼻孔を刺激する。バジルの葉、松の実、にんにくなどとオリーブオイルを混ぜてつくる鮮やかな緑のソースを絡めたパスタはみこの食欲を刺激した。

「ふああっ、いい香り！」

「ジエノベーゼはこのハーブの香りがいいよね。パンはおかわり自由だから、あとでソースをつけてパンを食べると美味しい」

「はい！ 楽しみです」

鮮やかな緑のパスタの中にはごろごろと大ぶりな海の幸が踊っている。ソースによつて緑に染まつたパスタが、照明を受けて、鮮やかに映える。

唾をぐくりと飲みながら、みこがフォークでパスタを絡めて口に運ぶ。

(美味しい！)

口に食べ物を入れながら話すとは無作法と思い、口にこそ出さないがみこの表情は美味しさから晴れやかなものになる。

具材として使われている、魚や貝、イカや海老の旨み。ソースに使われているハーブの香りと香ばしい炒つた豆の味。そしてそれらを引き締める唐辛子の辛み。それらが融和してまとまるところで、ジエノベーゼが成り立っている。

「海老がプリプリしていていいですね」

「ああ、それにジャガイモやインゲンもソースと絡んで美味しい」

「はい！ そう思います」

美味しい料理は怪異に怯え、緊張していたみこの心も解きほぐす。パスタを巻き取つて口に運び、時々パスタに混じりこんだ、具材を食べる。

「毎日怖い思いをして大変だろう。美味しい料理を食べて気分転換し

てくれ

「先輩、ありがとうございます」

みこは何口か食べるごとに烏龍茶を一口飲んで爽やかな風味を楽しむ。

「元気、出たみたいだな。良かつた良かつた」

満足げなみこを見て、景守は笑いながら言う。

「まだ余裕があるならデザートも頼むといい。今日は俺のおごりだから遠慮しなくていい」

「そんな悪いですよ。自分のぶんは」

「いいから、これは情報料だと思つてくれ」

景守に言い含められて、みこの提案は退けられた。あまり強く断るのも彼に失礼だと感じたからだ。みこはメニュー表を眺めてから決めた。

「それじゃあ、チヨコレートパフェを」

みこはデザートも心ゆくまで堪能した。今度は先輩がおすすめするモンブランを食べてみようと思った。

食事を済ませ、目撃した怪異の話、呪具を四谷家に設置する日取りを決めるのも済ませたら七時を過ぎていた。家族には“友人”と食事をしてから帰ると伝えてある。そのとき弟が何か形容しがたい表情をしていた。謎だ。

名残惜しいがそろそろ退店することになる。

「パフェもとても美味しかった……」

「そうか、良かった良かった。こうして話を訊くときはまた美味しいものを食べよう。気分転換したければ、どつか行つてもいいな」

景守としても今日会つたときよりも生氣があるみこの様子を見ていると安心する。

「ありがとうございます。……今度は私がおすすめのお店を紹介しますね。だから……、その、また、一緒に遊びに行きましょう。……怪異とか抜きでも」

みこの頬は、処女雪ヴァージンスノウを夕陽が照らすように紅潮していった。

怪異と遭遇するのとは異なる緊張で、心臓が彼女の胸郭内で跳ね上

がる。

「ああ、俺も仕事抜きで一緒に行きたい。お店も楽しみにしているよ」

そうしてみこは帰宅して入浴して就寝の準備をする。満ち足りた腹と気持ちのせいか、すぐに眠気が襲ってくる。すうすうと、私室に安らかな寝息が広がる。みこの心を不安にさせてるものはこの家にはない。

みこは微笑みを浮かべながらまどろみを楽しんだ。

彼女は夢を見る。怖いものを見ないですむ夢を……景守と再び遊びに行く時を待ちながら。

……みこは知らない。自分が口にした望みが、『デート』の誘いだと気づき、羞恥に悶絶する朝を迎えることを。

## 私の先輩

土曜日となり、景守は神津に依頼した呪具を用意できた。みこに連絡を取ればすぐにでも欲しいとのことなので、本日、みこと会つて渡すつもりである。

「ハナ……ああ、君が前に言つていた娘もいるのか」

「はい、ですから彼女にもすぐに渡しておきたいと思つて」

景守がみこと会つて最初の土曜日。電話でこのようなり取りがあつた。

みこは自分の友人が本人も知らないまま、よくないものを引き寄せていることは景守には説明済である。そのため、景守が用意した呪具にはみこの友人であるハナの分もあつた。自分のものだけでなく、厚かましいと思いながら友人の分も要求したのはハナにまとわりつく怪異を見た記憶がいまだ鮮明だからだつた。

友人が元気でないと嫌だ、そう思うみこは景守にお願いをしたのだつた。

さて、景守がみこと会う予定である場所へ向かう時、彼はふと気づいたことがあつた。

(たしか、この辺りにあの店があるはずだつたな)

それは土地の管理者が隠していた業界からみのいくつかの事件、そのひとつに関わる人物が持つ店。

『占い・お祓い ゴッドマザー 金運・仕事運・恋愛運全て根こそぎアップ』

「……怪しい」

胡乱な雰囲気の店構え。屋号からすでに怪しい。資料を読んでいたときから思つていたがこのゴッドマザーと呼ばれる人物は、景守があつてきた異能者とはだいぶ異なるようだ。

対応している客が去つたら接触しようかと思つていたが、景守は心変わりした。

ゴッドマザーの店の前に若い女性が一人立つていた。——正確に言えば傍らに立つ妖異がいる。

「みこ……？」

客は四谷みこと女友達だつた。伝え聞く特徴などからおそらく、彼女が百合川ハナなのだろう。

「おいおい……、あの娘、また」

景守は忌々しそうに顔を歪めた。経緯はわからないがみこはかなりたちの悪いモノに憑かれている様子だつた。

みこは怪異と引かれ合う性質でもあるのではないか、と景守は考えてしまつた。

妖異から身を守るため、ゴッドマザーの道具を求めているのか、と景守は推測した。それに関しては呪具をすぐに届けられなかつた景守にも負い目がある。

「兎に角、やるべきことをしなければ」

みこは相変わらず気づかないフリをしているが、いつまでそれが維持できるのか分からぬ。

『がゆい…』

景守はみこたちに近づく、距離を見計らつているとゴッドマザーがみこに渡した数珠が、妖異が放つ禍々しい気によつて爆ぜ飛んだところだつた。

景守の指先から糸状の結界、念糸ねんしが伸ばされみこに憑いていた妖異を幾重にも巻き付き拘束した。

『がゆつ……い、い！』

『黙れ』

景守の膂力でみこから引き？がされ、転倒した妖異。悶え、抵抗するものの、糸から逃れることはできない。景守は引きずり、みことの距離を取らせる。糸が鉄骨も圧碎できるほどの圧力で締めつけ、妖異を強制的に鎮めさせる。

異変を感じたみこと景守の視線がぶつかつた。

「先輩！」



四谷みこはハナにも呪具を渡そうと思つたので、景守と会う予定を組みハナを遊びに誘い出した。自分が受け取り、学校で会つたときには手渡すことも考えたが、渡せるなら早いほうがいいだろうし、ハナについても結界師ならではの知見を得られるのではないか、そういう考え方もあるって、やや強引ではあるが景守とハナを引き合わせてるつもりだつた。

(なんか……ついてきてる……)

迂闊にも暗い路地裏を通つてしまつたのが不味かつた。みこは後悔していた。

ハナの買い物に付き合い、さて景守と会おうと思つていたみこの計算は、友人の無軌道な行動でご破算となつた。

魑魅魍魎の棲み処となつた路地裏を通るとき、なぜかそこで一番“ヤバそう”なヤツがみこの後を追うようになつてしまつたのだ。ボロボロの服を内側から膨らませる膨張した身体。腐り爛れたよう大きな頭。禍々しい気がみこの心身を蝕む。

背中に氷塊を詰め込まれたような感覚が襲う。

嫌だ。恐い。恐い。——誰か。

(助けて……先輩……)

祈るような気持ちでみこは胸中で呟く。会つてまだ数日しか経たない。だが、それでも彼の存在はみこの中でかなり大きくなつていた。

会うまでもまだ時間がある。そこでみこはハナが噂で聞いていた“ゴッドマザーの店”に立ち寄ることになつたのだが……。  
(じゅ、数珠が……壊れた!?)

二度も目の前で起きた出来事。みこが呆然としていると突如として背後のヤバい奴が自分から離れたことを感じた。振り向けばそこに彼がいた。

「先輩！」

そう呼ぶみこの表情は知らず知らずのうちに明るい晴れやかなものだつた。やはり先輩は自分が恐怖し怯えているとき助けてくれる

のだと、みこは思った。

「偶然ここを通りかかつただけだつたが、早く会えてよかつた」

四谷みこの先輩はいつもの、何でもないかのように悠然とした態度で挨拶してきた。片手間で行つていることなど大変なことではないというかのようだ。

景守は手から伸ばした何本もの糸でヤバい奴の身体を縛つてみこから引き？がしてくれたようだ。

「何々、みこ。その人は誰？ というか、イケメンじゃん！」

「えつと、……彼は、その、先輩です。私の先輩」

「先輩？ ……そう、なんだ？」

「うんそうだよ」

断言するみこと景守に、そういうものかと受け止めたハナ。「そつか、私でつきりみこの彼氏かと思ったよ」

「えつ！」

素つ頓狂な声を上げるみこ。途端に火が付いたようにみこの透けるような白い肌が赤くなる。

「ち、違うよ」

「だつて、この間彼氏いるつて言つてたじやん」

「そうなの？」

「え、いや、いないですよ!?」

景守に聞かれて自分でも思う以上に焦り、慌てて否定した。景守に誤解されたくない。そう強く感じたのだ。

「はつ、そうだ自己紹介がまだでしたね。私はみこの同級生で親友の百合川ハナです！ハナつて呼んでください！」

「ご丁寧にどうも、俺は墨村景守。高校二年」

「あ、年上？ 確かに先輩だ！」

ハナはなるほどなーと納得した顔で頷いた。

ハナは景守の登場に驚いたようだが、景守の人柄もあつてすぐに打ち解けたようだ。みこは景守に待ち合わせ場所へ先に向かうように言われた。

「すまない、ちょっと寄り道する用事ができた」

「ああ……！ 了解です、お願ひします！」

景守の視線の先を見れば明確な言葉は必要なかつた。みこは心底安堵した。

「——アレがいたところを教えてくれ」

「アレ？」

「はい、あの、実は……」

話についていけないハナをわきに置いておいて、みこは先程の路地裏を景守に説明する。

「なんでそんなところ通つたの!? 危ないでしょ！」

「す、すみません先輩。返す言葉もありません……」

「あ、あの、墨村さん。みこは悪くないんです。私が近道しようつて言つたんです。確かに人の目も届かない路地裏を女子だけで歩くのは不用心でしたつ、すみませんでしたっ！」

みこが咎められている様子を見て、ハナは友人を庇う。事情を理解していないため頓珍漢な態度だ。

「ごめんごめん、怒つてるわけじゃないから」

ハナの懸命な態度に景守もふつと微笑む。

「兎に角、そういうときは俺を呼びなさいよ」

「——はい。ありがとうございます、先輩」

ハナはみこの顔を興味深そうに見た。悠二の顔を見てハナはニヤニヤと笑う。ハナの笑みを見たみこはパッと顔をそらした。みこは立ち去る前に老婆へ謝罪とお礼を言つたのだが、茫洋として反応がなかつた。



「坊主、あんた何者だい？ ソレがはつきり見えるのか」

老婆——ゴッドマザーの景守を見る目は、強い警戒と猜疑が現れている。彼女では景守やみこが明瞭に見えているものも、ぼやけた黒い靄程度にした見えない。

「それを何するつもりだ」

「祓います。それが俺の仕事ですから」

景守の念糸で縛られた怪異は既におとなしくなっている。『痒い……』『痒い……』と呟くだけで、陸に打ち上げられた魚のようだつた。

「初めまして、俺は結界師をやつている墨村景守といいます」

ゴツドマザーが瞠目する。

「墨村……結界師……。お前は、裏会の異能者か！　ふん、裏会なんて口クな組織じやないのによくいられるもんだね」

「裏会からの依頼で来ましたが、俺個人は所属していません」

「だが、お前は、墨村は裏会とも縁が深いだろう。お前はどの兄弟の子供だ？」

「長兄です。墨村正守」

「そうか、裏会幹部の卒か。あいつの細君も総帥の覚えが良い鬼使いだそうじやないか。やつぱり裏会にどっぷり浸かつていて。お気の毒」

「……俺のことはもういいじやないですか。あなたも気づいているでしょう。この街のおかしさを」

「だとしたら、なんだというんだい。私は面倒なことに首を突っ込むつもりはない。……それに、今日こそ己の限界を知ったからね。もうこの街からは出るよ」

ゴツドマザーは苦い表情で地面に落ちている数珠の珠を眺めている。

「……そうですか。ひとつお聞きしたい。記録にない神社について」「何？」

「文部科学省や神社本庁にも記録されていない神社があるんですよ。勿論、裏会の正式な記録にも残されていない。だけど、その神社は実在している」

ゴツドマザーの表情が強張る。それは困惑、恐怖、そして怒りによって化粧された表情だった。

「……知らないね」

「本当に些細な事でもいいんです。知りませんか？」

「しつこい坊主だね。知らないって言つたら知らないよ」

貝のように口を閉ざしたゴツドマザーの様子に、景守のほうが根負けして嘆息を吐いた。

「まあ、今度話を聞かせてください。それでは今日は帰ります」

「もう来んなと言つたはずだがね」

景守は怪異を引き摺りながら歩き出す。みこたちと会うにはまず、これらが住み着く巣を除去してからだ。そして収穫があつた。ゴツドマザーは嘘をついている。何かを知つてゐる。それを景守は確信したのだ。

## おしり大福×シユラスコ×はらこ飯

「あつ、おしり大福美味しい！」

「本當だ、美味しい……」

「でしょ！ お尻食べているみたいでしよう？」

「いや、お尻食べたことないからわからない」

四谷みこと墨村景守は期せずして、ハナの頓珍漢な問い合わせに同じ言葉を返した。

ゴツドマザーのもとを去ったあと景守はみこやハナと公園で合流した。そして今はハナが美味しいと勧めるおしり大福を景守とみこは食べていた。

「あつ、あのシユラスコ美味しいそう！ お肉祭りだあ!?」

「……本氣？」

ハナがおしり大福を一ダース食べたあと、屋台のシユラスコを見て大喜びで目を輝かせている。生命力の躍動を感じさせる瞳の輝きに、友人であるみこでもドン引きした表情だ。

「凄い肉の塊！ 目の前で取り分けてくれるライブ感……ダメ、抗えない！」

「本能の赴くままか……」

「うん、まあ、行つてらっしゃい」

「行つてくる！」

走り去るハナを見送るみこたち。

「凄い、あれだけの量をよく一人で食べられたね。そして、まだ食べるという」

「あははは、初めて見る人はびっくりしますよね。まあ、クラスのみんなや先生たちはもう慣れたみたいだけど」

早弁は当たり前で、一時限目から間食していることが多く放課後でも買い食いは毎日のように行っている。

友人のことを話すみこの表情は知らず知らずのうちに明るくなっている。先程まで、おぞましい怪異に憑きまとわれて緊張も解けているようになつた。それが見て取れたので景守も安心した。

「ハナは身体から放たれている生命オーラが強烈なんだ。人間というのは生きているだけで強い力を持つてゐるんだ。それによつて魔から自分を守つてくれるものだけど、逆にそれがよくないものを引き寄せてしまうこともある。奴らにとつて彼女は激しく燃える炎みたいなものでね、虫のようすにオーラへ引き寄せられてしまう。そしてハナに近づきすぎれば焼かれてしまう」

景守は屋台で買い物してゐるハナを目で追いながら話してゐる。彼女が身にまとう光は強力で長く見ていれば目が焼かれそうになる。「……私には見えないです。おかしなものは見えるのに」

みこは残念そうに咳く。

「ああいうのは人それぞれ、見やすいものが違うからだよ。俺はみこが見ている世界も見れるが、世の中にはハナのオーラを見れてもみこと同じものが見れない人もいる」

ゴツドマザーと呼ばれていた老婆も見える人なのだろう。しかし、どの程度見えるのか、景守にもわからない。

「ハナのあの食欲はその尋常じやない生命オーラのために消費されてるんだろう。オーラは奴らを引き寄せるが、ハナ本人を守ることにもなつてゐる」

「成る程……。だけど将来、糖尿病とか痛風とかにならないかなつて不安です」

「そこはまではわからなゐなあ。生活習慣病に関しては俺も門外漢だしさ」

景守が困つたように頭を搔いた。それもそうですよね、とみこも相づちを打つた。

「ハナの食欲がいつもより旺盛になつたらそれだけヤバいのが近くにいるかもしねないんですか？」

「あり得るな。奴らは現世こつちの理から離れていてその存在自体が世界を乱す。奴らの念は現世こつちにはねじ曲がつて作用する」

「」

みこは自分が見た恐ろしいものを思い出す。近くにいるだけで感じる重圧や悪寒は忘れることができない。

「俺は耐性があるけど、そうでない人間は奴らが近づくだけで心身に変調をきたすこともある。ハナが自分でも気づかない心の奥底で奴らの脅威を感じ取つて、それから身を守ろうとすればオーラをより強く放出することで、食事量が増すこともあります」

「……そうですか。私も気を付けてハナの様子を見てみます」

「それもいいが、気を付けて欲しいのはみこもなんだけどね。君は見えるだけで耐性が強いわけでもないのだから」

「そうですね、気を付けます」

「本当にわかっている？ 奴らに頭突っ込んだ奴が？」

「わ、わかっていますよ……」

景守の追究する眼差しに対し、思わず目をそらすみこ。

「彼女には話していないんだね、見えること」

もとより、簡単には話せることもでないし、信じてもらうのも難しいことだ。

「信じてもらえるかわからないことですし、見えることを奴らにどこかで聞かれるかもわかりませんから」

みこは遠くで肉に齧りついている友人を見て微笑む。

「知らなければ、例えば私が服を汚してしまっても、『おつちよこちよいだね』って笑つてすませてくれる」

「……」

「だけど、もしも教えてそれを信じてくれたら、それが見えない奴らせいいなんじやないかって心配かけてしまうかもしね。笑つていられなくなる。それが嫌なんです」

「……そうか、じゃあ少しでもそのために力を貸せるなら何よりだ。俺も、彼女が悲しむというのも嫌だ」

景守もハナと直接会つて、みこが抱く気持ちがわかつた気がした。「今日は本当にありがとうございました。この呪具」

みこが改めて景守に礼を言う。景守から渡された呪具をみこは既に身に着けていた。形状は出雲石の飾り紐型で、みこの左手に巻かれている。同じものをハナも身に着けていた。

おしゃれアイテムだとみこに数珠を渡されたときよりも、ハナの反

応は良いものだつた。

「いいさ、これも色々と協力してもらえてるからね。取引つてやつだ」

「はい、取引、ですね」

「あれく、どうしたのみこ？ ゴ機嫌じやん」

戻ってきたハナが不思議そうに言つた。シユラスコが六箱もビニール袋に入つており、既に片手には開封済のシユラスコを入れたプラスチックケースを持っていた。さらに腕には発泡スチロールの丼が袋をひつかけていた。

「な、なんでもない！」

みこが驚いたように慌てて取り繕つた。ただ話していただけならばあり得ない、見られてしまつたという動搖と焦燥。そして先程までひと時を惜しむという自分でもよくわからない感情にみこ本人も戸惑つた。

「シユラスコは美味しい？」

無理矢理な話題の変更を試みるみこ。ちなみに彼女はシユラスコとケバブの違いがよくわからない。

「美味しそうなよ。お塩の振り方と焼き具合が絶妙なんだ。素材の味がすごく活きている」

プラスチックのフォークで切り分けられた肉を何重にも刺し貫き頬張るハナ。肉汁が口中を満たしているのだろう、多幸感で表情が緩んでいる。

食事の様子はまるで栗鼠の食事だな、と景守は思った。

彼はふと、ハナが腕にかけているビニール袋が気になつた。

「もしかしたらシユラスコ以外に何か買つたの？」

「はい！ 美味しそうなはらこ飯があつたので買いました！」

「……そつか美味しそうだね」

なぜ、この地区には屋台の品揃えが良いのか、景守とみこは思つた。「ですよね！ だから二人の分も買いました。墨村先輩、このブレスレットのお礼ですから遠慮せずにどうぞ！」

華やかに笑うハナから景守たちははらこ飯を受け取つた。

「これ食べたら夕食食べなくなっちゃう……」

「ハナと付き合う男は財布に穴が空きそうだな」

みこたちは景守と公園で別れた。景守はこれからみこに教えられた路地裏に行くためだ。暫く話している間に、景守はハナとも打ち解けることができた。

「それでさあ、本当はどうなの？」

「どうつて、何が？」

途中で寄ったコンビニで購入したメンチカツの匂いを幸せそうに嗅ぎながら、ハナはみこに訊ねるがみこは胡乱げな目で友人を見る。

「だから、先輩だよ。墨村先輩。本当は彼氏ってあの人なんじやない？」

待ち合わせの時間になつて楽しそうに表情をほころばせたとき、そして先程の景守と話しているときの顔。それは何か近いものをハナは感じ取つた。

「……違う。違うから」

「嘘だあ、男の人とあんな風に楽しそうにしているなんて珍しいじゃん」

「うちは女子高だから、男子と話す機会がないだけだよ」

「ふーーーん？」

ハナがニヤニヤと笑いながら友人を見ている。友人が同年代の男と話している場面は見たことがある。しかし、彼女がそれでも景守に見せたような表情を見たことがなかつた。

それに、今のようなちつとも顔を向けない頑なな態度がますます怪しい。耳まで赤いのも語らずとも何か察することができた。

「まあ、そういうことにしてあげよう」

ハナから見ても景守は、友人が付き合うには危険な相手だとは思えなかつた。同年代の男子（ハナもさほど多く交流があるわけではない）とは違う、大人っぽい物腰やみこを気遣う様子は好感が持てた。あんまり弄つて怒らせて嫌なので、ハナは追及の鉢を收めた。

みことしても自分の心の整理で忙しかった。自分が墨村景守に抱いている気持ち。それが信頼や尊敬……だけではないのであれば、何であるか。

「――

想像することができる。だが、それは四半世紀も生きていらないみことつては未知であり、創作や他人の体験談でしか知りえないものなので、確信と得られず思考はまとまらずにいた。



景守はみこに教えられた路地裏を掃除した後に帰宅。シャワーを浴びてハナから貰つたはらこ飯をコンビニで買つた緑茶と一緒に食べた。はらこ飯が本日の夕食だった。

彼の目の前に広げているのは何枚もの地図とコピー用紙。そしてその上にはタブレット端末が置いてある。

探している神社について調べても、管理者の持つ記録は曖昧。裏会の記録もない。手がかりと言えそなのは、亡くなつた異能者の個人的な記録。

そのため、景守は市役所と図書館と博物館から、公式の記録を探ることにした。それは歴史学に則つた調べ方だった。

「大正まで遡つてもそれらしきものはないか……」

地図を調べても彼が探す神社はなかつた。しかし、異様なまでに記録がないことが景守にはより興味を惹かせた。

「岡トワ子……。その弟子ならば何か知つてゐるかと思つたが、それは予感的中したみたいだつたな」

タブレットに映つてゐるのは昔のTV番組の一場面だ。そこには

失踪したとされてゐる異能者の記録があつた。

今日出会つた老婆を思い出す。鎌をかける程度のつもりで問い合わせた一瞬、「なぜ知つてゐる」と老婆の顔に出ていた。それもすぐに隠して韜晦したが、景守は見逃さなかつた。

もつとも、景守も思いがけない反応に驚いたのが態度に出てしまつ

たので取り繕つてもそれがバレているからもしれないが……。  
「まあ、ここまで隠されている神社だ。みこやハナが参拝することは  
ないだろうが、早く見つけたいものだ」

## 夜のお仕事

「んつ……うう……ハア……んつ……ふつ…ああ、……ダメ、ダメ！」

先輩、んつ……」

四谷みこは魘されるように息を荒げる。

夢を見ている。

うつすらと目を開けば、自分を覆う被さる影を見る。

「——ツ」

スウツと呼気が漏れるが、反射的に上げそうになつた悲鳴を堪える。

結界師の庇護下にある家とはいえ、ヤバイ奴らをシカトし続けた自己防衛だつた。

「……」

何事もなかつたようにみこはカーテンを開いて、陽光が私室に入る。影は弟の恭介だつた。

「おはよう、姉ちゃん」

「へ……変な起こし方しないでよ。心臓止まるかと思った」

「なんか寝言を言つていたけど。やらしい夢でも見てたの？」先輩  
「うつて

「なつ！」

みこの頬が、内部に太陽をもつかのように紅潮している。とつさに枕を投げつけようと掲げるうちに恭介は退室していた。

「うう……。寝言……なんかヤバい夢見てたのかな？」先輩のことも呟いてたのか

みこは枕を下して抱きしめる。どんな夢を見ていたのか、彼女は覚えていなかつた。だが、寝言（それも先輩を呼ぶという内容）を聴かれていたことに恥ずかしさを感じていた。

四谷みこは普通の人には見えないものが見えていた。その存在に怯えながらも立ち向かわずに精一杯平常心を装い、見えないふりをしてやり過ごしていた。

誰にも相談できない悩みとして抱えていたのだが、悩みを話せる人

と会うことが出来た。

結界師の墨村景守。みこが先輩と呼ぶ男である。

景守は数百年続く結界師の家に生まれた異能者。

くせのある髪で黒に近いダークブラウン。端正な顔立ちの年上の少年。燐燐たる切れ長の眼がみこを案ずるような眼差しで、いつも彼女の言葉に耳を傾けてくれる。そして、自分がどうすればよいのか答えてくれた。

「あ、そうだ。取引の日だ」

スマホの画面で日付を確認したみこが呟く。取引の日とはみこが勝手につけた名前だ。景守の仕事を手伝うため日のことだ。

寝間着を脱いで制服に着替えて、前日に用意していた紙袋を持って退室した。

「さつきのコンビニにいたあれは、消費税が三%の時代の人だつたのかな」

「一〇三円です、と言つていたからな。……それにしても、死んでも働き続けるとは物悲しさを感じる」

みこと景守は放課後に会つて、景守はみこから紙袋を受け取った。そのあとに寄つたコンビニで見た妖異について話していた。妖異そのものは景守が既に滅している。

妖異をシカトするためみこが咄嗟に購入したおでんを二人で食べるため、近くの公園に移動した。なぜシカトをすることでおでんを買うことになつたのかと言えば、みこが妖異から目をそらした理由としておでんのチラシを見ていたということにしたからだ。

「君の学校にいる奴らは今日対処するつもりだ。借りたこれを使つてね」

景守が掲げているのはみこから貰つた紙袋だ。みこは紙袋に胡乱げな視線を向けている。

「それ……何の役に立つんですか？」

「ちよつとした呪いに使うんだ」

「呪い……。結界師つて、結界以外にもそういうことができるんです

ね

「まあね、そこまで凄いものを使うわけじゃないが。ああ、仕事があるからといつても何かあれば遠慮なく連絡してくれていいから」

その後、景守とみこはそれぞれ家路についた。みこは弟の恭介とともに心霊番組を観ていたが、テレビに映るおぞましい存在が映り、それに恐れて景守に連絡した後番組を観る意欲も湧かないでの、そのまま眠りについた。



「……先輩？」

「！　君は……。なぜ？」

夜、みこは自分が通う高校で景守と会っていた。まさか夜の学校で会うとは思わなかつたのだろう。景守はみこを見て驚いていた。

「こんなところに来るなんて」

「私でも協力できることがあるのなら、手伝わせてください」

この学校は自分やハナが通う場所。他人事とは思えなかつた。

「手伝わせてやればいいじゃないか。いつまでもうだうだするのも時間の無駄だよ」

景守に声をかけてきたのは虚空を漂い現れた一頭の犬。白銀の毛並みで尾だけが斑の模様がある。

「い、犬が喋った!?　というか、浮いている？」

みこは驚愕して思わず、口を押えた。おぞましい姿の怪異、あるいは清廉な気配を漂わせる守護霊などは見たことがあるが、眼前の犬のような例はなかつた。

「大丈夫だよ。彼は斑尾。まだらお開祖間時守の時代から墨村の家に仕えてもらっている妖魔だ。君を害することはないし今夜は俺の仕事を手伝つてもらうんだ」

「仕えるだつてえ、バカをお言いでのないよ！　わたしの主人は間時守様ただお一人！　墨村にや義理で付き合つてやつてるだけなんだ！」

じやなきや、誰があんたみたいな青二才のお守りするもんかね」

「青二才……」

「ああ……もう時守様のような男には一度と出会えないだろうねえ……」

困惑する景守を無視して愁いを帶びた呟きとともに嘆息する斑尾。みこはここまで情味豊かなこの世のものでない存在は、父親を除けば初めて見た。

「まあ、このようにプライドが高いけど忠犬なんだ」

忠義は景守ではなく開祖のほうに向いてはいるが。

「よし、それじゃあ君にも手伝つてもらおうかな。やり方はます斑尾に奴らの潜む場所を探してもらう。奴らが君の気配に反応したら君は奴らをシカトせずに見て欲しい。そして奴らが君に気を取られた隙に俺が滅する。人はみこだけだと油断させるために、俺は隠形しているから」

「おんぎょう?」

「姿や気配を認識できなくなる術のことだ。これも絶対じゃないし、もし異能者とバレたら警戒されて逃げるかもしないから、俺は隠れて奴らを滅して回る。好戦的な奴らなら、むしろ好都合だが臆病な手合いなどと逃げられて困るからな」

「つまり、青二才にとつての囮つてことさ」

「囮……わかりました。やります」

景守から説明を受けてみこはやや強張りながら頷いた。景守と組んでいなければ絶対に拒否していた役割だ。

みこたちは校舎を周り始めたが懐中電灯を使いながら歩く夜の校舎は不気味で、景守がいなかつたらみこは散策しようと思わなかつただろう。

そして、斑尾が奴らのにおいを感じて、二人の人間を誘導する。

「ここだね」

「ここですか」

「見え……てる……?」

「ひつ」

「見ええええ」

自らを認知するみこに近づこうとする禍々しき存在は、自身を囲む結界に阻まれる。

「滅！」

景守が結界で悪霊を圧碎した。碎け散り、残滓となつたものは虚空に溶けるように消えた。

結界師の隠形は見事なもので、みこですら少しでも意識から外れたら、近くにいることに気づけないほどだつた。これではみこに気を取れている霊たちは結界師に気づくことはできないのも当然だつた。

こうした斑尾の探索、みこの凹、景守の滅却という作業を続けつつ彼らは散策を続けた。

みこに歩幅を合わせているらしく、長身で脚も長い景守に彼女は難なくついていっている。

みこは隣を歩く景守の顔を見上げた。自分の頭より上にある肩、更高いところにある顔。

いつもみこに向けてくれる穏やかな雰囲気とは異なり、静謐で冷たい様子だつた。怒っているとか、緊張しているのとは違う。落ち着いていて真剣さが伝わつてくる。

（これが先輩の仕事の顔……）

思いの外、見つめ過ぎていたらしい。景守がちらつと一瞥した。見ていたことが恥ずかしくなり、景守から慌てて目をそらした。

「どうした？」

「ああ、こうしてお仕事をしているところを見るのが新鮮だつたので、つい」

「そうかな？ 何度かこうして結界術を使つていたと思うけど」

「そうなんんですけど、だいたいは困つているときにささつと助けてくれますから、こうやつてお仕事を間近で見るのは初めてだなと思いました」

夜の校舎を懐中電灯だけを光源にして歩いているから、気を紛らわせたいという思いもあってみこは饒舌にな。景守はいつもより口数が少なく斑尾はみこに無関心だ。

「こうして仕事について来させるのは初めてだつたな。本当は君を妖

魔とは関わらせたくないから、これは特別だ」

「特別……」

「妖魔とは契約してはいけないよ。関わるのもダメだ。君は意思疎通が取れるものとは遭遇していないんだったな」

景守は斑尾を見る。

「……斑尾以外」

「ええ、お父さんとも話していません」

「それでいい。妖魔との契約は異能者せんもんかでも慎重にやるものなんだ。言葉を交わせたとしても油断してはダメだ」

何度も、父の亡靈に話しかけたくなったことがあるみことしては、まるで自分の心中を見透かされているように感じだ。

「はい……。わかりました」

「あと君なら、ぱつと見可愛いと思つたからと関わってしまうこともないようにな」

「可愛い……えつと、小さなおじさんとか？」

「……小さなおじさんが可愛いとは思わないけど、まあ、そうだ。気を付けて。あと小さなおじさんの近くには本体となる大きなおじさんがいるよ」

「そなんですか！」

「ああ。口は君の半身を食いちぎるくらい大きいから可愛げなんてないぞ。飴あげるといわれても、おじさんにはついて行くな」

「あの、先輩……私、そこまで子どもじゃないです……」

いつも通りに会話ができたためか、みこの緊張もだいぶ和らいだ。景守が警戒するほどの魔性は校舎にも体育館にもいなかつたようで、退治は問題なく進みもう少しで終わりそうになる。

みこは深夜の学校巡りを惜しんだ。きっと景守と夜に会う理由がなくなるからだ。しかし、仕事と使命のため真摯に動いてくれる景守に、そんなことを思うのは失礼なようで心苦しい。

夜も三時を回つてきた。

「もう終わりでいいか」

「そうだねえ、あらかた見つけ出したと思うよ」

景守と斑尾が相談しているところを、みこは話し合いの決着がつくの見守っている。

話し合いは五分もかからなかつた。

「さて、みこ。今日の仕事は終わりだ。この学校に憑いているモノは除去した。まあ、時間が経てばまた集まつてくるかも知れないが、そのときはまた俺が滅しよう」

「先輩、ありがとうございます」

「君も帰るんだ」

「はい、そうですね、流石にもうバスは使えませんが……」

みこはそこで思考が止まつた。何か、違和感を感じたからだ。

(私は、どうやつて学校に来たんだっけ?)

景守と会つたときだつて既に深夜だつた。バスは出てないし、母親に車で送迎してもらつたわけではない。自転車だつて使つていなかつた。徒歩で移動するには遠すぎる。

「君はもう帰りなさい」

「あ、あの、でも、先輩!」

「ほら、落ち着いて、よく思い出して。自分が何か」

「わたし……?」

私の名前は四谷みこ。それが以外に名前などない……。

ほら、と景守が見せてきたスマホ。それはカメラ機能が起動していって画面に映るのは――

(え――?)

ボトツと廊下に落ちたのは一体の人形だつた。



「ああっ!」

みこは目覚めとともに跳ねるように起き上がつた。自分の顔や身体を触つて、自分が人形ではないと納得すると嘆息した。ようやく安心できた。

枕元でアラームを鳴らし続いているスマホのアラームを止めてから、景守に電話した。現座の時間は朝の七時。それでも景守はすぐに電話に出た。

「おはよう、みこ」

「お、おはようございます。先輩！　あのですね」

景守は鷹揚に挨拶してきたが、みこは焦りながら挨拶もそこそこに相談し始めた。

「ああ、それはみこの夢じやないよ。俺と一緒に夜の校舎を歩いたのは本当のことだ。ただ、君自身は家にいたわけだが、意識が抜け出したようだ。そして、君から預かっていた人形に宿つて、一緒に校舎を巡った。俺にもちゃんとみこと見えるくらいしつかりみこが人形に定着していたな」

「そ、そんなことが……」

みこは絶句した。おかしなものが見えるだけでなく、遠い場所に意識を飛ばすなんてことができるのは想像もしていなかつた。

「なんで、そんなことが、という質問したいかもだが、むしろ俺が驚いたぞ。人形に術はかけてはいたが、あのようになるとはね。そういうことができる者もいるが……。君が寝る前に俺と話していたから俺のもとへ来れたのかな？　それにしても、普通なら起こらないんだがな」

「へ、へえ。そうなんですか」

「まあね、心だけでも遠くへ飛ばすのは強い思いが必要だからね。そう簡単にはできないよ」

思い、そういわれてみこはドキッとした。昨日はテレビで恐ろしいものを見てたまらず景守に見たことや弱音や愚痴なども話して、通話を終えたときに彼の様子を気になつたまま就寝したのだ。

（気になると言つても普通はそんな強い思いになるの？　これが先輩以外でも同じことになつてた？　いや、それはないかな……。も、もしかして……、そうなのがな？　ああ、そんなことよりも！　仕事の邪魔をしちゃつた……）

みこの困惑と悲嘆など知らない景守は話を続ける。

「珍しいことだがこれで何か悪いことが起きるというわけでもないから、まあ気にするな」

(すみません、気にするなどいうのは無理です……)

「昨日は助かつたよ」

「え?」

「本当は~~匂~~はみこの気配が強く残つた人形を使うつもりだつた」

紙袋に入れて渡した人形は、みこが長年持つていたものだつた。景守はその人形に術をかけて妖魔をおびき寄せる式にするつもりだつた。慮外の事態ではあるが、みこの化身となつたことで、景守の想定以上の効果があつた。

「みこがあの場にいて俺も仕事が捲つたし、思つたよりも効果があつた。ありがとう」

ちゃんと役に立てたんだ。

反則、と口の中で呴いて、みこは顔の火照りが収まるまで俯いたまま顔を上げられなかつた。

## 愛する者支えるという覚悟

墨村景守はあらかじめ待ち合わせていた場所で、裏会実行部隊夜行の隊員たちと合流した。夜行の頭領は景守の父親、正守である。その縁もあつて、人手が不足している夜行の仕事を手伝うことになった。

「久しぶりだな、景守」

「影宮さん、水浦さん。今日はよろしくお願ひします」

中性的な顔立ちの青年が景守に声をかける。彼の名前は影宮閃。そして隣にいる落ち着いた青年は水浦蒼士。水浦はうんと頷き、景守の挨拶に応じる。

夜行とは景守の父、墨村正守すみむらまさもりが頭領を務める裏会の実行部隊だ。

実行部隊とは言うものの、軍事色は薄く能力の使い方を知らない異能者を一時的に引き取つてその力の使い方や向き合い方を教育することもあつて、実情は異能者同士で一種の擬似家族のような関係を形成している。

影宮と水浦は共に三五歳と若いながらも夜行では古参の幹部で、影宮は妖混あやかしまじりという人でありながら妖の力を持つという性質故、俗世間では生きられず夜行に身を寄せた経緯を持つ。

水浦はかつて人形と呼ばれた兵士だつた。異能者としての素質を子供の頃から見出され、攫われて記憶と感情を除去されて情緒が発達する前に戦闘訓練を施され、戦闘人形として育てられた経緯を持つ。夜行に身を預けることになり徐々に洗脳も解けていき情緒も育つようになり、今では夜行でも実行部隊の幹部にまでなつた。

無感情な少年兵だった彼も影宮と同じく三五歳の大人となつていた。

冰浦が運転する車に乗つて目的地に移動する。少年時代、洗濯機やシャープペンシルに興味を持っていたが、大人になつてからは車やバイクに興味を持ち彼なりのことだわりを持つようになつた。

「えーと、影宮さん。俺たちの今日の仕事つてのは、これですよね」

ファイルに閉じられた資料を再度確認する。仕事は妖と人間の婚

約の阻止のため、その妖の抹殺。

「小説とか漫画だと人間と妖怪の結婚とかありますけど、本当にそういう人つているんですね」

「こういう仕事は俺も初めてだ」

「ある意味、勇者だな。成功すれば伝説だつたことを現実にした大偉業だ」

氷浦も落ち着いた声で、相槌を打つ。

「まあ、阻止さえできればいいのだから、祓うなり封じるなりでもいいわけですよね？ 必ず滅することを望んでいるんですか？」

「いや、そうではないようだ。とりあえず、自分の子供と関わらないようすればいいらしい」

依頼主は大地主で、山や田畠を持つだけでなく、ビルなども管理している不動産も数多くあるらしい。そして依頼主が持つ土地には神祐地も含まれている。

妖と結婚したいと考えているのは、依頼主の息子だつた。今年で二〇歳の学生と資料に書かれていた。

景守たちは依頼主からの話を訊いて、彼の息子と件の妖がいる別邸へと案内された。すぐ近くに森がある長閑な場所だった。

応接室に案内された景守たちは間もなく、依頼主の息子がやつて来る。一緒に連れている着物の美女が妖なのだろう。

「はじめまして、僕は万里。彼女が瑠花です」

互いの自己紹介も終えるとすぐに本題に移つた。影宮が気になつていたことを瑠花に訊ねた。

「まずは確認させて欲しいのだが俺たちはあんたが妖だと訊かれていだ、しかし、あんたは妖じやあないな。妖混じりだろう？」

「え？」

「……本当か」

影宮の指摘に景守と氷浦が驚き、瑠花は驚いたように瞠目した。影宮を妖気の探知・分析が得意であるので彼の発言には景守たちも信頼していた。

「ふむ、お前はあの男よりも見る目があるようだな。いかにも私は妖

混じり。龍仙境で生まれで齡三〇五歳になる」

「さ!? え……」

「竜姫さんと同郷の妖混じりか」

「竜姫? ああ、奴のことは知つてゐるぞ」

瑠花は不機嫌な表情をする。心なしか外の天候が少し荒れている。力ある妖混じりや異能者はその意思を現実へ影響を与えることがしばしばあり得る。

龍仙境というのは特殊な土地で人の世と妖の世の境界が曖昧な土地で、竜姫はその土地の力を得て土地神クラスの妖の力を持つ強大極まる妖混じりである。

竜姫は普通の人間よりもはるかに長い寿命を持つていて、若々しい外見ながらも数〇〇年以上を生きて古老（竜姫本人にこの表現は禁忌とされている）である。

「竜姫……とは腐れ縁、そう腐つてゐるのだ。今にも腐れ爛れた悪縁なのだ。まつたく! あの女ときたら私が右と言えば左、海が好きだと言えば山が好きだという、猫が好きだと言えば犬が好きだという! まつたく、私とあいつはいつか雌雄を決する必要があると常々思つてゐる!」

瑠花のやや興奮した口調に景守たちはなんと反応したほうがいかわからぬ。

「それで、お前たちは私を殺すつもりか?」

「いや、正直俺達では勝てる自信がありませんね」

景守、影宮、氷浦でチームを組んで妖退治をしたことは何度もあるが、瑠花から感じ取れる力は、三人で協力して勝てる目算がない。「あの、そもそもその前に確認したいんですけど、瑠花さんはどう知り合つたんですか?」

「僕はこれでも異能の家系その継承者として頑張つてきました。ですが、家督は弟が継承することに決まり、父さんにはいつも出来のいい弟と比べられて、勝手に期待されて勝手に失望されて、弟は弟でそんな僕を見下すどころか逆に慕つてくれて、それが余計に惨めで……」万里は趣味で嗜む絵画や彫刻に優れた才を現して、世間的にも高い

評価をされているらしい。しかしながら、異能者として一番大切な才を持ち合わせていなかつたようだ。

を持せ合はせていたが、これがまた

「それで自殺しようと山に入つたら、瑠花が僕を助けてくれたんです！　その時に一目惚れしちやつて、僕の人生この人のために捧げたいなつて」

「私は別に助けたのではなく、若くて健康であるのに好き好んで自殺する理由に興味があつただけなのだがなあ」

素つ氣ないようなことを言いつつも、瑠花の頬は赤くなっている。

「歯の浮くような台詞を並べおつてからに！それで……」

こうして万里と瑠花ののろけ話は九〇分近く続いた。ようやく終

わざだと景守たちが精神的疲労に参つていただとき  
万里のほうから詰題を変えた。

「それだったら僕に提案があります！ 皆さんにも僕たちにも得があるアイデアです

「……聞こえますよ？」

「僕と瑠花は駆け落ちするので、皆さんは瑠花を追い払つたと父に報

「告していただきて、僕は家族に反発して出て行つたことにします」

影宮の表情がすとんと落ちる。頭が痛そうにこめかみを摩つてい

る。氷浦は何とも不思議そうな顔で万里を見ている。

それではどう駆け落ちするかについて何かお考えはありますか？

うするがなど」

ええ、それは勿論。ちゃんと考えて いますとも!」

景守からの質問に、万里は自信ありげに用意した資金や駆け落ちした先での予定を話し始める。しかし計画性で言えば杜撰極まりなく、ただの見通しの甘いものだつた。

「……無理だろう」

「無理だな」

「無理ですね」

「どうしてですか!？」

影宮は面倒くさいと思いつつも、しかし、これも給料のうちだと思  
いながら景守のほうを向く。

「景守、この一人が駆け落ちした後、どうなると思う?」

「そうですね、彼のご家族が行方不明となつた彼の居場所を捜索する  
でしようね。今回のことの後なので警察ではなく裏会に妖による人  
攫いとして討伐を依頼するのではないかな?」

瑠花がたとえ強大な妖混じりであつても無敵ではない。裏会が動  
けば討伐あるいは封印されることだろう。

「そんな！ どうして殺されなくちゃならないんだ！ 僕らはただ静  
かに暮らしたいだけなのに！ そつとしておいてくれないんだ！」

「ただの人だと思われていたなら兎も角、妖ものだと思われているの  
が不味い。ただの駆け落ちならご家族が、見逃す可能性もゼロではな  
かつたかもしない」

まあ、ないだろうなと思いつつも景守はそう付け加えた。いずれは  
妖混じりだとバレてしまつてもやはり危険だと滅ぼされることもあ  
るだろう。

「龍の姿にならず、変化しなければ大丈夫なはずだ！」

「まあ、あなたが奇跡的に覚醒して努力し、一人で田舎にて生活できて  
いくだけの生活力を身に着けることができれば、やれるかもしれない  
。だがしかし、駆け落ちのための資金も、逃避行のあとの展望がな  
いあなたの状態を見れば、その可能性もないでしょう」

逃げた先でどうやつて生きるのかではなく、二人で何をしたい、ば  
かりで具体的な生活を立てるための構想に欠如すること甚だしい万  
里に、景守は容赦しなかつた。

「いずれ生きるのに瑠花の妖の力に頼らざるを得なくなり、それで周  
囲にばれて、終わりだ。瑠花ほどの力を持つ妖混じりを放置するほど  
裏会の目も節穴じやない」

骨まで蜂蜜をかけた砂糖漬けのように甘い万里へのとどめだつた。

「そんなことはない！ 僕は上手くやつてみせる！ 年下のくせに偉  
そうに説教するな！」

「よせ万里！ 私は俗世間の事情には疎いが、この者たちが嘘を言つていいようだということは、なんとなく分かる」

瑠花は首を振りながら嘆息した。

「……すまんが万里、駆け落ちの話はなしにしよう。きっと駆け落ちしても私たちは幸せにはなれない」

がひとつと思つたのに……」

「頑張る？ 親の金と工賃を使つて裏会に依頼する程度か  
とつての頑張るなのか？」

葉は有刺鉄線つきの冷笑の言葉だつた。

「でも自己憐憫の沼に浸かっている時間があれば、血反吐を吐きながらでも働け、体を休めている間に脳が焼けるほど勉強しろ。そして彼女の居場所を作れるように考えろ、行動しろ——それが、家族を守るつてことだ」

水浦は感情のドアに忍耐という鍵をかけていたのだが、このときその鍵が緩んでしまい、万里へ感情に任せた言葉の熔岩を吐き掛けてしまった。

元来 氷浦は寡黙な男だ その出生故にニミニニケーリシモンも得手ではないが、それでも今ばかりは言葉は彼の口から溢れ、表情の変化に乏しい顔には激情が浮かび上がっていた。

お前の彼女への思いもその程度か……安い

水浦の声に、好意の微粒子は含まれていなかつた。

[ ]

景守と影宮には氷浦が何を思ったのかわかつてしまい、彼の言葉を制止するタイミングを逸してしまった。

氷浦は二年ほど前に妻と娘を失っていた。夜行が非道な人体実験を多数繰り返していた裏会の研究室を肅清した際に、研究室の残党に

よつて妻と娘が逆恨みによる八つ当たりめいた報復のために殺されてしまつた。これを受け、氷浦は単身で残党を討滅したものの、後ろ暗い過去として彼に付き纏うこととなつていた。

一度は戦闘人形として育てられ、感情がほぼ全くと言つていいほど育つていなかつたかつての彼ならば抱かなかつた情動と呵責、罪の意識が彼をいまだに縛り、心中で闇色の炎が燐つていた。

「ぼ、僕の思いを馬鹿にするなあ！ アンタは知らないだろうけど、あの日、僕を助けてくれた時、瑠花のためならば死んでもいいとさえ思つたんだ！」

目の端に涙を溜めながら万里は叫んだ。ようやく言葉を取り戻した影宮は万里を宥めるように言つた。

「だつたら頑張つて一人でも生きていけるだけの力を身につけてはいかがですか。それこそ命を棄てるくらいの気持ちがあるなら、やってみればいいじゃないですか」

「それで駆け落ちしたかつたら資金も親の金じやなくて自分で用意するんだな」

「僕は役立たずとか低能と馬鹿にされることには何ら痛痒を覚えない。僕が父さんや兄弟たちのように才能を持つてはいるわけでもないし、何ら有能であるわけないことはしつてている。……だけど、瑠花への愛を軽んじられることは我慢できない！」

万里は覚悟の小さな松明を瞳の隅にともした。

「僕は決めたぞ！ 今の僕で瑠花を幸せにできないならば、必ず幸せにできる僕になつてみせる！だから……待つていてくれないか、瑠花」

「待つさ、人の一生など私にはあつという間だからな。待つのは得意さ」

こうして夜行への依頼はキャンセルされた。キャンセル料が生じたがそれは万里のツケとなつた。

## 帰還

「みこー、見てみて！見てみて！」

百合川ハナが喜色満面で四谷みこのもとへやつて來た。HR前の時間だ。他の生徒たちもそれぞれ友人たちと雑談をしている者、予習をしている者、通学途中に買つた漫画雑誌を読んでいる者、それぞれ授業前の時間を過ごしていた。

「……どうしたの？」

何か嫌な予感めいたものを感じたみこは、慎重に訊いた。  
友人がご機嫌なのは喜ばしいが、こういうときの彼女は何か厄介ごとを持ち込むことが最近では増してきた気がするのだ。

「じゃじゃーん、こないだ神社で撮つた写真いっぱいイイネ貰つちゃつた、」

そう言つてハナが見せたスマホの画面に映るのは、休日にハナと行つた神社で撮つた写真だつた。ハナのSNSに投稿されていてイネは彼女が今まで投稿してきたものの中では、一番もらえている。

「……ああ、あれね」

「あつ、大丈夫だよ。ちゃんと顔をスタンプで隠しているから！」

内容は夕焼けを背景にしたツーショット写真。身バレ防止のためみことハナの顔は見せないように処理されている。

「いや……、別のがガツツリ……」

「別の？」

「なんでもない」

せつかくの会心の一枚もちゃんと見ることができないみこは心苦しく、俯いて視線を写真から外してしまつた。

写真であつてもそこに映る怪異たちを、ハナは見ることができないらしい。巨大な怪異同士が争いついには片方が捕食している恐ろしい光景なのでみこはできれば直視したくない。

みこの様子に気づかず、ハナはSNSでかつてないほどイイネを貰えたことで有頂天になつていた。

「それであたしつ、自分には写真の才能があると言つても過言ではないと思うの！」

「……過言なのでは？」

「ええっ？ そんなことないよう！ ……ほら見て見て、じゃーん！」

みてみて！ インスタントカメラ！」

「……」

みこは漫画で見たことがあるような古いカメラを見せつけられて、嫌な予感にかられた。

「これでいい感じのスポットを巡つて映えくなアルバムを作るの！」

「——」

みこの顔が思わず強張った。

彼女の先輩である墨村景守すみむらかげもりが言うには、ハナのよくないものを引き寄せる体質である。それを考えられば映えなアルバムではなく、ヤバいの大図鑑が出来上がるのがみこには容易に想像がついた。

「ハナ……あのね、ハナの写真すっごくイイと思うんだけど」

友人のため心を鬼にしてアルバム作りを諦めさせなければ、婉曲的に忠告しようとしているとシャツタ一音が教室に響いた。

「……なんで撮つたの？」

「イイ表情してたから！」

ハナが見せた写真には自分が映るだけでなく、背後に何かが通り過ぎる影があった。

「——ッ！」

みこが思わず声をあげそうになるのを堪える。学校に居座つていった怪異を景守が滅したはずだが、もう現れていふとは！

「写真つてね……日常の一部を切り取つたモノなんだよ……」

（深そうで浅い！）

「すつごく素敵な写真！ 絶対才能あると思う！」

どうやつて止めようかとみこが思つていろいろに声をかけられた、みことハナが声をした方に振り向くと少女がいる。学年はみこと同じ。

金髪に染めた髪をツインテールにした小柄な少女。頭はみこの胸

元くらいだ。

「ユリアちゃん……？」

二暮堂ユリアはみこが普通の人には見えないものが見えていると疑い体育倉庫で道具の片付けの手伝いをしたときに、みこはユリアに追及された。

倉庫にいた靈は景守が既に祓つたあとだつたため、ユリアはみこが見えることの証明するために考えていた計画は失敗して、みこからは追及をかわされてしまった。

「えっと、誰……？」

「この前の体育の授業で仲良くなつたの……ね？　みこちゃん」

「う、うん……」

ユリアがまだみこが見えると疑つていると、彼女の目配せや表情から悟つた。

「さつき映えスポットの話してたでしょ？　わたしそういうの詳しいんだあ」

「えつ、そうなの？」

「もしよかつたら、おすすめスポット案内してあげよつか？」

ハナはユリアの思惑に気づくはずもなく、提案に食いついた。

「えつ、いいの!? 行く行くーつ！」

「ちよ…ハナ…それは」

ユリアが自分を試すために友人を唆しているのであれば、案内される場所は心霊スポットに違うない。みこは確信めいたものがあり断ろうと言葉を考える。しかし、みこは口下手ではなくとも、口が上手いわけでもない。

彼女が考へているうちにユリアに写真の腕前をおだてられてテンションの上がつたハナはユリアを抱擁して、その豊満な胸にユリアの顔を沈めるほど締め上げてユリアの意識を奪つてしまい保健室送りにしてしまつた。

その後、ユリアは“ハナがシメた子”としてみこの教室では本名は知られてないが、不名誉なあだ名でそこそこ知名度を持つことになつた。

「先輩に連絡しなくちゃ……ああ、怒られちゃう」

謎の神社に現れた狐の怪異でさんざん心配させてしまつたあとで、わざわざ危険に飛び込むようなことになり、みこは胃の辺りに鈍い痛みを覚えた。

みこは景守に相談して同行を了承してもらい、ハナとユリアにも同行者が増えることを認めてもらつた。ハナは景守が来ると伝えれば顔を輝かせて歓迎していた。

ハナは景守が好みなのかとみこは胸中で霧のように、かすかな焦燥が漂つっていた。



土曜日。みこは何故か山道を歩くことになつていた。

みこの予想した通り、ユリアが案内した場所は心靈スポットだつた。そこは呼鈴山の寂れたバス停で降りて登つた先にある、真つ暗なトンネルだつた。内部は電気が通つてないのか真つ暗で空気も淀んでいるのかじめじめして不快感がある。コンクリートも劣化して所々に朽ちていた。

景守が言うには怪異やよくないものが集まる小規模なエアポケットになつてゐるらしい。景守が例えた悪霊の巣という言葉にみこは寒気を覚えた。

結局は景守のみこが体調不良であるとハナに告げることで撮影会は終了となつた。

だつたのだが――――――

「……辛い」

みこは一人、山道を歩いていた。トンネルから離れてバス停を目指していたはずが、いつの間にか迷子になつてしまつたらしく一人だけ歩いていた。

「先輩も、ハナも、ユリアちゃんもどこに……？　あれ、先輩から貰つた御守りがなくなつてる？　最悪だ……」

だいぶボロボロになつてゐる公道沿いに歩いてゐるつもりが、バス停に着かず不安になつたみこは見つけた民家に道を尋ねることにした。

「あの、ごめんください」

「はい……。あら、珍しいお客様ね」

出てきたのは四〇代くらいの初老の女性だつた。みこを見え意外そうに驚いていた。

「どうしたの？ 迷つたのかしら」

「は、はい。あの呼鈴山つてバス停を探してゐるんです。ご存知でしようか？」

「ああ、あそこね。知つてゐるわよ。でも、あなた疲れているみたいじやない。……少し休んでいつてはどうかしら？」

初老の女性の意外な申し出にみこは瞠目する。

「え、でも、ご迷惑ではありませんか？」

「気にならないで。今日は人も集まつていてごちそうも用意してあるのよ。お上がりなさいよ」

気が付けばみこにも、家の奥から人の声が聞こえてくる。何人かが賑やかに話したり笑つたりしている声だ。

「それじゃあ、お言葉に甘えて……お邪魔します」

家に案内されてみれば二〇人ほど人が居間にいて雑談に興じながら机に並べた料理を食べていた。開かれた窓の向こうの庭では子供たちが遊んでいる。

「……多いですね」

「さあさあ、遠慮しないで座つて座つて」

初老の女性は機嫌が良さそうにみこを座らせて、料理を取り分ける皿を用意した。

今まで空腹を感じなかつたが、料理を見れば食欲を覚えた。ハナほどの健啖家でもないが流石に長いこと歩いたせいだろうかと、みこは皿に盛りつけられた料理を見ながら思つた。

「美味しそうだね。俺も食べてもいいかな？」

「つ！ せ、先輩つ!?」

みこが驚くのも無理はない。そこにいたのは景守だつたのだ。

「先輩、どうして？」

「君を迎えて来たんだが、まだ時間がかかりそうでね。僕も一緒にいいかな？」

「ええ、勿論よ。ぜひ上がつて頂戴」

「ありがとうございます」

初老の女性は景守を歓迎して、景守は庭から上がってきた。彼が土足で上がってきてみこの隣に座つた。みこ以外、景守が土足であることに気づいていないようだつた。

「あの、先輩……？」

「みこ、声を抑えて。こちらから声をかけなければ彼らは俺たちを気にしない」

景守がみこの隣に座ると小さな声で囁いた。耳元に感じる声と彼の吐息にみこの体温が上がつた。

「ここにある料理や飲み物を食べたか？」

「い、いいえ。まだ口つけていません」

「よかつた。それじゃあ、そのまま食べたり飲んだりしてはだめだ。どれだけ腹が減つたり、喉が渴いたりしてもだ。絶対にな」

「わかりました」

「それと、何か貰つたりしたか？」

「いえ、何も」

「わかつた。飴玉一つでも貰つていたらここに置いておけ。こここの物を持つて帰つたらだめだから絶対に」

景守の力強い眼差しに、みこは気圧されながら頷いた。景守がこそりと移動して玄関からみこの靴を持ってきた。そして彼は手帳のページを切り離して、人形を二つ作つた。

「この紙の人形に息を三回吹きかけて」

「え？ は、はい……」

みこは理解できないがそれでも景守への信頼から、わからないまま彼に従つて人形を受け取り、息を三回吹きかけた。

「それじやあ、人形を君が座つているところに置いて。そうしたら静

かに俺について来てくれ」

「わ、わかりました。……あの、先輩。ここつてやつぱり」

「みこ、今は何も聞かず、一緒に来てくれないか」

真摯な眼差しの景守にみこは頷いた。彼の緊張が伝わって来たのか、みこの指先が冷たくなり、微かに震えはじめた。

景守はみこにさせたように人形へ息を吹きかけ、自分が座っていたところに置いた。

「みこ、靴を履いて庭のほうから出よう。人形はあくまでも一時的な誤魔化しだ」

ここに来てみこは何故かと訊ねることはしなかった。景守が答えないのはわかつていたし、答えを知る前に動かないといけないと彼女も直感していた。

景守が言うように、みこたちが黙然と出て行つても気づかれることはなかつた。

「あ、あの、それでハナたちは？」

「大丈夫だ。一人ともちゃんと向こうにいるよ」

「よ、よかつた……、いつの間にかはぐれちゃつてみんなに何かあつたらと思つて心配で」

「安心してくれ、俺がちゃんと案内するから」

「ヤバいものに私が関わつてばかりでいつも迷惑かけてすみません」

「本当に、みこはどうも闇や怪異に関わつてしまふ性分みたいんだな。今回もハナと二暮堂だけでも行かせてもよかつただろう」

「……そう、なんですが……」

「闇を恐れるんだ。闇を恐れて近づかないことが、最大の護身なのだから。それでも逃れられない闇に遭遇してしまったならば、屈しないことだ」

「」

それから暫く歩くうちに空が暗くなり、歩いた後方は闇に包まれている。心臓の音で耳が痛くなる。

「まあ、君が優しくて、友人たちが闇に近づいたら、知らないふりがで

きないのはわかる。だから困ったときには俺を頼れ」「あの、どうして私を助けてくれるのですか？」

景守が答える前に、闇の向こうから誰かが迫つてくる気配がある。「化かしていたのがバレたようだな。走るぞ！」

「ええ!？」

「走れ！」

「あっ！」

景守はみこの手を取つて走り出す。木々の間を抜けながら走り続けると川が見えてきた。

「あの川を渡るんだ！」

「なんかヤバいのが近づいて来ましたあ！」

トンネルで目撃したおぞましい怪異よりも恐ろしい姿に、みこの心臓は強烈にステップをふんで踊りまわつた。血の気が失せた顔で叫んだ。

唐突に、狐耳の少女二人が現れた。みこと景守の横を通り過ぎると、穢れに満ちた雄叫びを上げて怪異は逃げていつた。

「くそっ」

景守の口汚い罵倒を訊きながらみこの意識が薄れていつた。

◆◆◆

「みこ！ よかつた……！」

「あれ、私は……？」

目覚めたとき、みこは病院にいた。景守とハナとユリアがみこの顔を覗き込んでいた。

トンネルからの帰り道、バスの運転手は突然に現れた獣のような影を避けようとしてバスは横転。怪我人は奇跡的にみこ一人だけだったが彼女も検査をすれば命に別状はなかつたのだという。すべて景守に後から聞いたことである。

「恐らくドライバーが見かけた影というのは、トンネルから逃げたや

つだろう。すまない、みこ。俺が取りこぼしてしまった。その逃げたやつをドライバーは目撃してしまったようだ。本当にすまなかつた「先輩が悪いわけじゃないですよ、そんな、謝らないでください」

景守はハナが不在のときにみこに説明した。ユリアは自分が発起した心霊スポットへの紹介が、思わぬ事態になつて顔面蒼白になつて二人に誤つていた。

「ゞ、ゞべんなさい……、みこちゃんがどれくらい優れた能力者なのか……知りたくて……」

泣きべそかきながら自分が心霊スポットを紹介した真意を説明したが、景守は呆れたように嘆息をついた。

「みこは異能者ではない、ただ見えるだけの普通の女の子だ」

「え？ 見えてる、だけ……？」

「うん、そうだよ」

はぐらかす必要はないと思い、みこは素直に認めた。

「そ、そうだったの？ でも、ゴッドマザーを引退に追い込んだんじゃないの？」

「ゴッドマザー？」

「えっと、誰だつけ？」

「なんで知らないの!?」

ユリアが補足説明したことによってやくみこは誰だつたか思い出し、景守はあの老婆が隠居したことを知つてはいたが、それがユリアにこのような誤解を生んだのかと頭が痛かつた。

「それはまったく関係ない。それに異能者というならそれは俺のほうだ」

「え、そうなの!？」

「気づいてなかつたのか。結界も滅した奴らも見えてなかつたんだな」

「私ははつきりと見えていましたよ」

みことユリアで見えているものが違う、結果としてわかつたこととそのために必要だつた労力がまるで見合わない結果となつた。

死んでも働くことになるとは気の毒に

「ごめんハナ、家族以外面会できなくて……。うん、大丈夫。検査だけだから」

四谷みこは病院の休憩スペースで友人のハナに連絡していた。当初の即日退院の予定と異なり検査入院することになったからである。

「差し入れのお菓子は何キロ必要?」

「はは……。要らないよ。というか、キロつて……」

ハナと同じ量を食べれば待っている未来は苦しいダイエット地獄だ。十代の娘と変わらないスタイルの母を持つみことしては、母より体型が崩れるというのは危機感を煽られる思いだ。

（前はちょっとくらい、とか思つていたけれど……）

最近は見た目にもよく気を遣うようになつた気がする。食べるのもそうだが、美容品などにも何かと興味が強くなつたとみこは感じている。それは最近知り合つた先輩からどう見られるか、と気になる気持ちがみこの中で優先順位が高くなつたのだ。

ザザツという耳元の音で音もなく思惟の泡が弾けて、みこはハナと通話中の自分をあらためて確認した。

ハナは何か話しているようだが雑音で声が聞き取れない。電波が悪いな、と思いながら友人の言葉を聞き取ろうとする。

「もしもし?」

『でんわ切つて』

「す……っ!?

注意されて反射的に謝りかけたみこは、途中で通話OKの休憩スペースにいることに気づき、振り返る。

そこにいたのだ。怪異が。

異様に下顎が長く、洞のようにぽつかり開いた口。片目が潰れた虚ろな目をした異様な男の姿をした怪異。

「」

視線を虚空に投げ出し、シカトし始めたみこ。怪異をシカトして見えていないように振る舞うことこそ、みこの怪異への護身だ。

『切つて、でんわ切つて……』

空いたままの口から出て来る声は、咽喉を通った空気が感じられないような違和感のある声で、みこは内心身震いを禁じ得ない。

事故に遭つて怪異から彼女を守る御守りも失われた。もしもある怪異が電話をしているからと襲い掛けられたら、みこには身を守るすべがない。

ザザツ、ザザーと雜音が怪異から発しあじめ、頭痛に苦しむように頭を抱えて悶える怪異。

みこは緊張で全身が強張り、皮膚には鳥肌が生じ、冷たい汗が内側から入院用に着ていたパジャマを湿らせた。

「ハナ、ごめん！ そろそろお夕飯だから、また連絡するね！」

嘘である。夕飯までには時間があるが、咄嗟に嘘を吐いてハナとの通話切つた。

怪異が立ち去つたのを視界の隅で確認して、みこは嘆息を吐きながら椅子に座る。ようやく緊張がほぐれていく。

（怪我よりもあつちのほうが頭痛いよ。……見分けづら……）

氣だるい疲労感を感じながら、みこが視線をふと向けた先に見知った姿があつて、みこは心臓はステップを踏んで舞つた。姿勢も自然と伸びる。

「せ、先輩……」

頭髪はくせのある髪で黒に近いダークブラウン。端正な顔立ちの少年で学生服姿でも優雅さを感じさせる。

みこが先輩と慕う墨村景守すみむらかげもりだ。学校は違うが一学年、景守のほうが上となる。

景守は一〇歳に満たなそうな少女と何か話して、いると現れた母親とも何か話している。

母娘と別れた景守はみこを見つけて手を振つた。  
手を振り返したみこは花が綻ぶように自然と微笑む。先程までの疲労感は既になかった。



「あいつらの声が五月蠅くて、それで適当な受け答えをして検査入院することになつたて……みこ」

「すみません、先輩！　本当にすみませんでした！」

「いや、謝らなくともいい。不可抗力などころもあるから」

呆れた様子の景守にみこは肩を落としている。呆れられるのもしようがない、そう思うみことだつた。

入院することになつた理由は客観的に見れば、馬鹿馬鹿しいことだなどみこ本人も思つた。

みこはバスが横転する事故に遭いながらも、小さなこぶと少々の打ち身程度の怪我だつた。問診の際に、ふとした出来心と好奇心で脳に何かあれば普通なら見えないものも見えるのではないか、そう思い医師に質問したのだった。それがいけなかつた。

医師が問診をしても突如湧いて出た奴らの意味を持たたない言葉を紡ぐだけの声に、問診が聞き取り難く、適当な受け答えをしてしまつたがために医師は検査入院をみこに言い渡したのだった。

「……、少し歩くだけでもヤバいのがたくさんいて、困つているんです。やつぱり病院だからこんなに……」

「病院は集まりやすいところではあるけど、土地の問題だ」

隠してもみこには意味がないと思い、景守は調べてわかつたことを教えた。

「病院が建つ前、この辺りは大きな池があつた。さらに昔は古戦場で池に死体を沈めていたのだという。池が埋め立てられてまた多くの生き物が命を落として未練や妄執が染み込み、次々と地中の池に念を吸い込み続ける。ここはそういう場所なんだ」

「……あの、それは生きた人間には」

「土地そのものには悪影響はないだろうが、死靈が集まり過ぎているのが問題だな。今回は君もその被害を被つたわけだ」

入院の件を指摘されてみこは苦笑した。

「とりあえず、ここにいる良くないものは、君が入院する一晩のうちに片付けておくよ」

「……よろしくお願ひします」

部屋の掃除をする予定を話すように景守はみこに話していた。彼女が利用することになつた病室も、他の病室に蔓延る怪異たちにもみは怯えていたので景守の提案は素直に嬉しかった。

「それにしてもあの人たちの意味がよくわからない言葉……あれは何なのでしょうか」

「意味なんてないさ」

みこの疑問に景守は彼の私見を交えて答える。

「生前の記憶、その中にある言葉をただ言つてはいるだけで誰かに何かを伝えたいわけじゃないことが多い。あれらは壊れたミュージックボックスのようなもんさ」

「生前の記憶……」

「奴らの言葉が何か言い方がおかしかつたりする経験が君にはあるかな？ 妙な言葉を繰り返すだけ、というものだ。それもバグを起こしても誰かが修正することもないからそうなつてはいるだけのようなんだ」

「ああ、覚えがあります。コンビニで昔の消費税で請求されました。あれ、昔は店員だったのかも」

「人間、遊ぶために働くものだというのに、死んでも働くことになるとは気の毒に」

景守がシニカルに笑いながらそう言つた。

「先輩、人と言葉を交わせる靈はいるんですか？ そういうのと話したことにはありますか」

「いるにはいるけど……話してみたいのかい？ お父さんと」

「確かに父とはもう一度話したいと思つていますが、それだけじやなくてほかの見えるものと、考えていました。人には見えないモノが見える私は、これからできることは何だろうと」

「話して意思疎通が可能であれば何かができるのだろうかと？」

景守に台詞を先取りされたみこは黙然と頷いた。みこには景守が賛成してはいないようだと感づいた。

「君には話しても大丈夫なモノとそうでないモノを見分けられるのか

? 人に擬態した怪異に襲われたことがあったよね。あんなことは珍しくはないんだぞ」

以前、景守と公園で話していたときである。ただの子供だと思つていた。子供が手をふり、みこもそれに手を振り返したのが不味かつた。見えることがばれると子供の姿は禍々しい異形へと変わり、みこへ襲い掛かってきたが景守によつて事無きえた。

「俺にはごく僅かな例外のためにみこが危険に身を晒すことは賛成できない。あいつらが人と言葉を交わせる奴らもいるが、何故言葉を交わせるかわかるか? 奴らにとつての言葉は生きた者を欺くすべだ。<sup>えもの</sup>人を誘き寄せるためにね」

「

自分を誘き寄せるために人にそつくりした怪異が「助けて」と言えば、みこは騙されないという自信はなかつた。自分を見つめて駆け寄つてきた怪異の姿を思い出して身震いする。

「まあ、俺が言えることはだ。何がしたいか、何をしたいかを決めるのは急ぐ必要はないということだ」

「……そうですね。急ぐ必要はないですよね」

「さて、そろそろ本題に入ろうか」

「本題?」

「君があの神社で結んだ縁を断とうと思う」

## 神はそこまで人に興味を持つていない

東京郊外へ墨村景守と四谷みこは向かうためバスに乗っていた。休日の土曜日。学生も会社員も乗り込む人の数は少なく、景守たちの目的地に近づくにつれて人が徐々に少なくなった。

隣の景守をみこは何度も観てしまうのは、彼が珍しい格好をしていたからだ。

黒の手甲、黒の着物、黒の足袋と、墨ずくめの格好。袖を翻す様子は鴉のようだった。杖のような長いものを納めている布袋を持つていたが、それらは彼の家が結界師の仕事をするときの装束なのだと、みこは説明を受けた。

今までと違う装い。結界師としての仕事着を着る景守に、自然とみこも気持ちが引き締まる。

「そろそろ着きそうだ。こう言つても意味ないかもしねないが、あまり緊張し過ぎることがないようにな」

「はい……先輩、ありがとうございます」

不安がまったくないわけではないが、みこの表情は覚悟を決めた毅然としたものだった。

「後は任せろつて言われて関わらせてもらえないかと思いました」「関わらせたくないのは本音だけど、君は当事者だからね。知ることも、どうするか決めることもみこは決めるべきだと思うんだ」

「ハナは私があの神社へ連れてきてしましたから。だから、私がなんとかしないといけないと思うから先輩、私にも協力させてもらつてありがとうございます」

バスの後方で並んで座る景守とみこの会話は、少ない乗客たちの耳にも届かないよう景守が予め結界を張つていた。目につく魔も既に除去してしまつている徹底ぶりだ。

見てないふりをするしかないみこにとつて、実力行使で恐ろしいもののを滅する景守は頼もしい。

「改めて確認すると、これから向かうところは良くないものが集積さ

れるエアーポケットみたいな場所だ。有象無象が集まっているから  
キツいだろうが、そこは頑張ってくれ』

景守がみこへ状況を整理するために話し出す。

妖魔が集まる影響か民家から人が離れて廃墟同然と化したこと  
で、行政からも忘れられた土地。裏会の管理者も不在という表世界、  
異能業界の両界から見放された土地と言えた。

「調べてわかつたことだが、あの一帯は人が立ち寄らないが例外的に  
近づいてくる人たちがいる。目的はあの神社だ」

「えつ……」

「山の神様にお祈りをすれば、願いを叶えてくれる。そんな噂を信じ  
てやつてくる人たちだ」

「あのそれじゃあ、願いを叶えるというのは」

「叶えてはやるんじやないかな。だがそれは神ではなく神を詐称する  
あやかし  
妖だよ」

「妖？ 神様ではなくて？」

「廃神社を棲み処とする妖。それが山の神様の正体だろう」

景守が神社の件でみこに正体の推測を話し始めた。

「君に移つたと思われる邪氣、それと山周辺を調べたことで考えた。  
土地神の類ではないと思った。妖から土地神になることもあるが  
……それが人間に手出しするつて話はあまり聞かないなあ」

景守が腕を組んで唸る。美人にストーカーしていた神はいたらし  
いけど、など独り言を呟いていた。

その神についてはみこも非常に気になるところだが、今は目下の問  
題のほうである。

「妖から土地神になることもあるんですか？」

「あるね。そもそも土地神は大きく分けて二種類ある。一つはその神  
祐地内で生まれ出た土地神。これが生え抜きの例。生え抜きは邪氣  
がなく、より純粹な神としての存在だ。そしてもう一つが元来力を  
持つた妖が、神祐地に住み着く等して土地神に昇格するケース。最  
初、神社の件で疑つたのはこれだつた」

「もう疑つていなんですね」

「ああ、人の願いを叶えて対価を得る。そんなことをするほど神は何かを求めてないし、人間に差し出せるものに、神が興味を持つものがあるかどうか……。何より、神はそこまで人に興味を持つていらない」勘だけどね、そう付け加えた景守だが彼には確信があるようだとみこは思った。

「妖だつたとして、願いを叶えることは本當だと思いますか？」

「願いは叶えてくれるだろうね。だが、願いを叶えてくれるだけの魔法の壺つてわけじやあない」

「見返りが必要、ということですね？」

「そういうことになるだろうね。眞実は、願つた者にしかわからないだろうけどな。困つたことに、この類の誘惑にかられるのは異能者にも多いんだ」

裏会にも記録されている異能者が件の土地で行方不明となつている。異能者以外にも行方不明になつた者も少なくないだろうと景守は考えている。

「……私はただ、ハナに憑いたヤツをなんとかしたいからお参りしただけなのに……」

「みこ、その願いはすぐに叶つたんだよな？」

「はい……」

景守の確認にみこが首肯する。みこが願つたときハナに憑いていた巨大な怪異。それが突如現れた禍々しい巨獸が滅ぼした光景は、今でもみこの記憶には鮮明に残つてゐる。

「ならばその場で対価……見返りを要求されそうなものだけどね。見逃されたのは何故か。

その時に願つたときのことをよく思い出してくれ。みこ、君は何て願つた？」

みこは当時に胸中で念じた言葉を思い出した。

——お願いします。  
——お願ひします。

——助けてください。何でもします。

どうかハナを呪いから救つてください。ついでに私も……」

「……ついでに私も助けて欲しい……つてお願いしました」

「ついで、か。そして奴らからは『ざんかい』って言われたのか」「そうです。あの着物の子たちに助けられたらし、三回助けてくれるつてことなのがなつて……」

景守はみこの言葉を訊きながら、自分の推測を話し出す。

「あの場所に立ち入る者は明確な願い事は大抵がひとつだ。通常では成就できない願い。だからこそ、もう縋ることは神頼みしかないと」

「困ったときの神頼み、ですね」

「まさにその通り。だけどみこはナビで偶然あの場所を見つけてふらつとやって来た。そして願い事が二つ。だけど願いの内容が『ついでに私も助けて』なんて曖昧な願い。願望を成就させて対価を得る契約は、人間だけではなく魔のほうもにも課せられる。願望が成就できたか、魔のほうへも対応に苦慮したのだろう」

「そうか……あのときは」

巨獣と二人の着物の少女が何か揉めているような様子を、みこは思い出した。言葉はまったくわからなかつたが、あれは願いを叶えることができたか、出来なかつたかで口論していたのか。

「『ざんかい』が三回助けるという意味であるならば、君にはあと二回助ける必要が奴らはある」

景守は三と指を立て、一つ指を折り二とみこに見せつける。

「今はまだ猶予があるが、……君の願いの対象はハナも含まれている。もしも、ハナが知らないうちに奴らに助けられていれば、既に願いは成就したことになる」

黒檀のような瞳が、みこを見据える。

「奴らは高利貸しだ。貸した金を返さないならば取り立てられる。そして、取り立てる相手はみこだけではない」

「……ハナ」

みこの声が震える。緊張で咽喉が渴き、水を飲もうとするが手が震えてペットボトルのキャップが上手く開けられない。

恐ろしい話だが自分はそれを訊かなければならないとみこは自分

に言い聞かせる。景守が自分に話しているのは、みこ自身が当事者であり、友人を巻き込んだしまつた責任の取り方を、友人の護り方を教えてくれているからだ。

「私はどうすればいいんですか？」

「みこには神社へ通じる道を作ることを協力して欲しい」

「道？」

「ああ、神社には結界がある。結界こそが簡単には立ち入ることができない理由だ。結界を破ることができなければ、決して辿り着くことができない場所」

山という異界。そして神社がある山はしんゆうち神佑地とされる靈山だ。俗世間と神社を隔てる結界は展開させやすく、閉鎖性も強いものとなる。

「これはほぼ間違いないだろう推測だが……はじめてみこが神社に来たとき。君が神社に立ち入れたのは、ハナがオーラで結界を破つたのだと思う」

「オーラが？ ヤバイ奴らからハナを守るだけじゃなかつたんだ」

「凄い能力だけれどね。もしもみこが一人で神社へ向かつていたならば辿り着けなかつただろう。そういう意味じゃ、今回は間が悪かつた」

「……」

俯くみこの頭に、景守がそつと手を置く。

「間が悪かつただけだ。誰も悪くはないさ」

「すみません……ありがとうございます」

通常は結界で辿り着く事はできないが、景守の結界師としての能力が神社に至るための道を無理矢理実体化させるのが景守の計画だった。

そしてみこに頼む役割とは指針。道を作るすべがあつても神社へ繋げられなければ、結界の向こう側へは渡れない。魔と契約したことでは神社との繋がりがあり、神社と共振できるみこを指針にして初めて確たる道のりを歩むことが出来る。

「まあ、みこは俺と一緒に山を登つて神社まで行けばいいだけから、そ

こまでは難しく考えなくていいよ」

「道中に湧いてくるだろうモノや肝心の結界破り——いや、越境かな? それを大したことがないみたいに言うのはゞ立派です」

「えつ」

不意に知らない男の声を訊いてみこの心臓は強烈にステップをふんで踊った。

みこと景守が座る座席の通路を挟んだ反対側の座席に座る男の声だつた。頂が平らな円筒形の黒い帽子をかぶり、黒いコートを着た男で、年齢はどれくらいかみこには検討がつかなかつた。若くも見えるし、中年にも見える。

「こんにちは」

男はあいさつをしてくるが、景守は警戒して、みこは驚きと困惑で何も言わなかつた。

「ついあなた達の話が耳に入つてしまつて、つい口出ししてしまいました。すみませんでした」

「嘘をつけ。結界で話は聞こえないようにしていたんだ。普通ならば聞こえるわけがないだろう」

みこには景守の周囲から黒い陽炎のようなものが立ち昇るのが見えた。これはオーラなのかと、みこは思つた。ハナのオーラは見えなかつたのだが、景守が纏うように見えるのは何なのか……。

「お前は何者だ?」

「私は神童ロム。同業者ですよ。私もこの先に用事がありましてね」

ロムはそう言つて、チカラの石と称する石を景守とみこたちに「賄賂です」と言つて差し出してきた。

「あなたたちの仕事に私も関わらせてもらいたいのですよ。暫くの間、お話ししよう墨村景守さん、四谷みこさん」

彼らが名乗る前にロムはそう言つて笑つていた。